
魔法少女リリカルなのは 裏切りの翼

ネジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 裏切りの翼

【Nコード】

N0444R

【作者名】

ネジ

【あらすじ】

この小説は以前連載していた魔法少女リリカルなのは〜反乱の翼〜のリメイク作品です。原作との設定の差異等が含まれますが作者の妄想によって具現化されたものなので気に食わなかった場合はバツボタンで処理してください。

なお、この作品はStrikerSの時間軸に完全オリジナル話を突っ込んでいます。

原作との類似点はキャラぐらいなのであしからず。

「あの日を境に私達の手に入れた平和はあっという間に崩壊して
いく」

「私は、あくまであなた達に立ちほだから」

「そんな！私達が戦う理由なんて！」

ブローグー私のキオクと運命のあの日々

最近突然思い出した遠い昔の記憶。

私じゃなく姉さんの記憶。

まだ母さんが優しくかった頃、時空の庭園と呼ばれていたあそこには私と同じ年の一人の男の子の姿があった。

父の姿は知らず母も仕事で忙しく、家族で一緒に遊ぶ事も殆どなかったために、数少ない遊び相手として私達は時間も気にせず毎日一緒に遊びまわった。

そして何年か経つうちに、幼いながらも私達はお互いに意識しあい、その想いは恋になった。どこにでもある様な幼い初めての恋。

しかしその恋は唐突に終わりを迎えた。

母さんが進めていた研究の次世代エネルギー炉実験の事故、それが私の頭に残っている最後の姉さんの最後の記憶。

光に包まれながら私（姉さん）の意識は薄れていった……最後まで彼の名前を強く願いながら。

「つばさ!」

叫びながら私は飛び起きた。

そして真つ先に目に飛び込んでくるいつもと変わらない天井を見てどうやら夢を見ていたと知る。

見知ったここは時空管理局本局の女子寮の一室。

私はゆっくりと身を起こし周りを確かめる。

飛び起きたせいなのかベッドは少し乱れて居るがそのほかに特に変わった様子は無い。

目を時計へと移せばアラームをセットした時間より30分は早い時間を指している。

「まだ時間はあるんだし」

声に出し、アラームを止めてからシャワーを浴びる。

やや熱めのお湯が私のまだ少し靄のかかる頭を徐々に覚醒させていくのを感じる。

ちよっとはしゃっきりとして来た頭でさっきの夢について考えてみる。

あの事件で私の姉であるアリシア・テストロッサの命は吹き飛び、彼はそれ以来庭園から姿を消したのだ。

とはいえ当然、姉さんのクローンとして私が生まれた時にはすでに

彼の姿はどこにも見当たらなかった。

しかし、と私の理性が今までの思考を否定する。

こんなことはありえない筈なのだ。というのもこの姉さん記憶は私
が生まれる以前に消去されたと聞いている。事実、最近までこんな
夢を見たことはなかった。

自己紹介が遅れたが私の名前はフェイト・テストロッサ。

10年前のPT事件の当事者であり、その時に唯一の肉親の母さん、
プレシア・テストロッサを失い天涯孤独になった過去を持つ以外は
何のことは無い只の執務官だ。

「ハア……」

自分の意思とは関係なくため息が零れ落ちた。

水滴がタイルを叩く音がやけに耳に五月蠅く響いてくる。

ため息をつくと幸せが逃げると言う人がいるが私はそれでもいいと
思う。確かに現実はため息如きで揺るがないしそれならため息をつ
くより歯を食いしばって現実をより幸せへ向けて努力する方がいい
に決まってる。

でもそれが希望など無く努力をしたって到底好転する見込みが無い
のなら別だと思う。

ため息をつき安楽な夢や記憶の中に想いを馳せてもいいはずだ。

「要は妥協も必要だ」

思わず、言葉が漏れた。

こんなマイナスな思考ばかり思い浮かぶ原因さっきの夢のせいかもしれない。

私の幼少期の思い出はあまり良いものばかりじゃなかった。

私は姉さん、アリシア・テストロッサのクローンとして姉さんの享年時の年齢で生まれた。

私が生まれた時は母さんは私を姉さんとして、とても溺愛された。

でも、そんな夢のような時間は長くは続かなかった。

その溢れんばかりの愛を受けていたのは姉さんであって私じゃなかった、私はどこまでいっても私だった。

それに、母さんは、気付いてしまった。

私の中に眠る生まれてからの（・・・・・・・・）姉さんの記憶はそこまで。

そこからは私の、フェイト・テストロッサの、アリシアに成れなかった私の記憶。

豹変した母さんにまた愛してもらったために私は盲目的に動き回った。母さんの望みが私の望み、そう本気で信じていた。

私はジュエルシードというロストロギアを得るため奔走し、そこで
同い年の白い魔法少女と出会った。

そこまで思い出したところで記憶の海に溺れてしまっていた自分を
無理やり現実へ戻す。

嫌な予感がしてウィンドウを呼び出し時計を見ると、かなり余裕が
あったはずの時間も限界ギリギリだ。

「うわっ！」

慌ててシャワーを切り上げて、トーストをスープで強引に押し込み
職場へと向かう。

今日は確かとある管理世界の遺跡の調査だったはず……

「行ってきます」

誰もいない広すぎる部屋に別れの声を投げかけて私はこの部屋を後
にする。

次元航行艦への発着所へと急ぎながら私は再び思考の海に埋没する。

最近まであの部屋で私は10年前の事件を経て知り合った白い魔法
少女、今では管理局のエースオブエースとまで言われている高町な
のはとルームシェアをしていた。

が、彼女が子どもを二人拾い、その二人のためにユーノと4人で暮

らし始めたためあの部屋に住んでいるのは現在私一人だ。

この部屋はもともとルームシェアを前提にしていたため今の自分には広すぎる。

上に申請したところ一人部屋の用意ができ次第そこへ移らせてもらえる手はずになっているが、上のやることだ、おそらくあと一ヶ月はこのままだろう。

と、そんなことを考えながら発着所直通の転移ポートに向かっていくと

やはり今日も……

侮蔑 嘲笑 陰口

視界の端々で男女問わずに私を指差し嗤う、蔑む、妬む。

私はクローンなのだ。

それもPT事件というところでもない大事件まで引き起こした化け物なのだ。

改心したとはいえこれから先どうなるのか分からない飛び切りの不発弾なのだ。

誰もこんな得体の知れない化け物に同等に接しようとなんかしない。PT事件を担当し、私に養子の申し出までしてくれたリンディ現提督はこれを見越して緘口令を敷いてくれたそうだが人の噂に戸口は

立てられない。

彼女の養子の申し出だつて受けられなかった。

彼女が本意でもって優しさを私に向けているのは分かっていた。

でも、

でも！

そんな差し伸べられた腕にしがみつくと勇氣は私には無かった。

怖かった。

周りの目が

怖かった。

私のせいで誰かが何かが傷つくのが

だから、私はフェイト・テストロッサでその管理局での扱いなんてこんなものだ。

特に友人と呼べるものが数えるほどしか存在しなかった昔の私はこの状態から逃げようと仕事に逃げた。

しかし、そうやって得た地位はまた私の首を絞めた。

前科者の私が執務官なんていう管理局のエリート地位に就いたせいで私はさらに孤立した。

私だつて、私だつて、選んでこんな身の上に生まれたんじゃない。

こうやって、生きていく以外に、どうやって、私は生きればよかった

ぶつける当てのない怨又の聲が自分の中からふつつつと沸き起こる。
魂の慟哭、こんな声を聞かせる相手も場所も今の私には存在して
ない。

第一話〜私たちのこれから〜（前書き）

何とか二話目です。原作ブレイクが続きます。SetSのストーリーをベースに自分の妄想をねじ込んでいきます。不快に感じる方はバックボタンでお戻りください。

第一話〜私たちのこれから〜

「……となります。あなた方も気をつけて下さい。それでは失礼します」

時空管理局地上本部の一室、扉の上のタグには機動六課隊長室とある。

そして、管理局の制服を着た恰幅のよい男性が中にいた人物との対話を終えて出て行く。

身なりから察するに現場をまったく知らぬエリート街道まっしぐらの高官だろう。

男の出て行った後の部屋に残された女性は暗い表情をしながらため息を一つついた。

女性の髪色は栗色、名を八神はやてといった。

その女性の年齢と容姿はおおよそ軍隊と呼称して良い時空管理局においてとは異様だ。

何しろ20代の後半から30代の男性が中心の管理局内で彼女の見た目はどう見ても20代前半かそれ以下、そして群を抜いて美しいのだ。

その実、年齢は19歳。

彼女もフェイトと同じく後ろめたい過去を持つ。

約10年前第97管理外世界、地球において起こった闇の書事件の当事者でありその上本人の意志はなかったにしろその中心人物である。

しかし、彼女はフェイトとは決定的に違っていた。

家族が、いるのだ。

実際に血の繋がった間柄ではなく、先ほどの事件の名を冠することにもなった闇の書の守護騎士達である。

確かにフェイトにはアルフという使い魔がいるのだが、どうしても使い魔は主に背く事はできない。

つまり、どこまでいっても対等な家族とはなりえないのである。

それに比べて守護騎士達は良くも悪くも事件によって母体となる闇の書が完全に壊れた。

結果、彼女達は八神家として一つの家族になれたのだ。

そしてその家族の支えの元で彼女は管理局に入局し持ち前の頭の良さと強大な魔力的素質を生かしメキメキと管理局内での地位を上げていった。

とはいえ、どれだけ出世したといっても彼女が10年前の事件で知り合ったフェイト、なのはの親友であることには変わりなかったが、そしてこの管理局、特に地上本部に足りないものを補うため、この度自身が率いる部隊を立ち上げたのである。

名を、機動六課

多大なお偉いさんの後押しを経て、いろいろな裏技を使い、彼女の思い描く最高の舞台を作り上げた。

と、一端の隊長である彼女の経歴はひとまず置いておいて。

そんな彼女の部隊は思わぬところで最大の難所を迎えようとしていた。

そしてこの六課の危機に立ち向かうため、八神家の末っ子である自

分の小さな副官に指示を出した。

「六課の隊長陣を全員召集……今すぐにや」

その副官も先ほどのやり取りを聞いていたのか上司であり相棒であるはやての浮かない顔に心配しつつ、やはりそこは敏腕隊長の相棒、すぐに行動を開始した。

「はやてちゃん……了解です！」

数十分後その部屋にははやてとその相棒の手のひらサイズの小さな副官、リンフォース？、そして機動六課の二つの分隊、スターズとライトニングのそれぞれ隊長と副隊長をあわせた5名が勢ぞろいしていた。

普通きちんと数えればこの場に集合すべき正しい人員の数は6名の筈だが、その話はまた後にするとする。

そして現在、このエースたちは10年前からの付き合いになる自分の主、もしくは親友の暗い顔に何か嫌な予感めいたものを感じていたが誰一人として言葉を発することができずにいた。

そして数分の沈黙の後、耐えかねたスターズ分隊隊長の高町なののが先手をきって切り出した。

彼女は管理局のエースオブエースの二つ名を持つ管理局の顔を担う人物である。年齢も先のはやてと同じ19歳、はやてとはフェイトと同じ10年来の親友である。

「ねえはやてちゃん緊急招集って何があったの？」

なのはの質問に先ほどからの暗い表情を崩さずはやては覚悟を決めたようにゆっくりと話し始めた。

「他でもないフェイトちゃんの事や……」

フェイトと聞いて皆の顔色が変わる。そんな皆の不安げな、再び会話が停滞しそうな雰囲気を一早く察したはやては淀むことなく言葉を紡ぐ。

「フェイトちゃんはこの機動六課設立のほんの一週間前に向かった任務で意識不明の重体に陥つとる。」

はやての言葉の通りフェイトは任務中に大怪我をされており今も意識が戻っていない。

その任務中に何があったのかは全くの謎。と、いうのもフェイト以外のその任務に向かった調査隊は全滅しており生存者はフェイトだけという有り様だったのだ。

「幸運にも偶然近くを航行していた次元航行艦があったから良かったものの、もしも通りかからなかったらフェイトちゃんは多分今頃はもう死んどつたやろう」

その航行艦によってフェイトたちが現地の管理外世界から発していた救難信号が拾われフェイトは発見されることが出来た。

何故かフェイトたちが乗ってきた艦の乗組員はオペレーターも含め全滅し艦のログにも何も残っておらず、且つ唯一の生存者も意識不明のためこの事件は管理局では全くの謎とされている。

「そのフェイトちゃんが今さつき病院から連れ去られたらしいんや」

はやてが告げた事実はその部屋にいた全員の思考を停止させた。

「え？」

「テストロッサが……連れ去られた？」

「どーゆー事だよ、はやて！」

分隊長陣3人が言葉をリレーの様に繋ぎ紡ぐ。

因みに最初なのは、次にライトニング分隊の副隊長ではやての家族の一人であるシグナム、そして最後が同じく八神家のヴィータである。

「さつき上の人が来てな、これを受け取ったんや。まずは目を通してみて欲しい」

そう言うとはやては端末を操作し部屋のカーテンを引きスクリーンを下ろし映像を再生する。

それはどうやら病院の防犯カメラの映像らしく最初のほうは通常通り病院の業務を映していた。
が、

「ここや」

はやてが言葉を発した瞬間映像の中の様子が変わる。なんだか病院内の人が全員パニックを起こしたように慌ただしく動きだす。防犯カメラの映像故に音声は無いため想像の域を出ないが恐らく警報が何か緊急を告げる合図があったのだろう。

次の瞬間真っ黒なフードを深くかぶった男性か女性かも解らない人が見覚えのある金髪の女性を抱えて通り過ぎた。

フードの端から見えた感情のない仮面が隊長陣にとって嫌に印象強く、なぜか気になった。

そこで一旦映像を切りはやては照明をつけた。

「そんな時偶々病室にいた看護師さんの話によると犯人はフェイトちゃんの病室に突然現れ茫然とする周りを後目にあつという間にフェイトちゃんを担ぎ上げ、丁度駆けつけた局員の攻撃を軽々よけ独力で転移したそうや」

はやてが話す内容はどれも衝撃的で特に付き合いの長かったなのは未だにうまく状況を飲み込めていないようだった。

フェイトが血塗れで運ばれてきた時に真っ先に病室へと駆けつけたのも彼女であり10年前から彼女の管理局での扱いに対して抗議もしてきた。

「…………フェイトちゃんを連れ去った人の行方は解ってないの？はやてちゃん」

そんな彼女の願いも虚しくはやての表情は変わらず首を横に振る。

「駄目なんよ…………痕跡が何もかも消えてしもうとるんや」

「そんな…………」

絶望的な状況に思わず崩れ落ちるなのは。しかしはやての言葉は止まらない。

「酷な事を言うようやけどこの件は今後は回しや」

その言葉を聞いた瞬間なのはの中で何かギレた。

「主！」

「はやて！」

周りのシグナムとヴィータが動きだすより早くなのはははやてに掴みかかった。

「はやてちゃん！何でなの？はやてちゃんもフェイトちゃんを見捨てるの！？自分が上に上がるために友達も……」

「高町！」

感情にまかせ一気にまくし立てるなのは。

その感情がピークになった時、核爆弾級の発言をしそうになりシグナムが大声を挙げてそれを制する。

「……それ以上は、いくら、お前でも、許さん」

一語一語絞り出すように低い声でシグナムが警告する。

言葉には威圧感が込められており、一語一語発する度にその場の空気が重くなっていく。

そんな膠着していく空気の中、はやてがゆっくりと口を開いた。

「ええんや、シグナム。私はなのはちゃんにそう言われてもしかあない事を言ったんや。自分でも分かっている」

「しかし……」

食い下がろうとするシグナムにはやては視線を合わせ静かに首を横に振る。

「なのはちゃん、悪いんやけど手、放してくれへん？」

あくまでもやわらかくはやてはなのはに訴える。

「ッ！……ごめん」

一方、なのはは少し頭が冷えたのか、やりすぎた事を感じて手を離す。

「私もフェイトちゃんの件についてはこのままで終わらせるつもりはあらへん。いくら管理局に嫌われてても友達を見捨てる程、心を棄てたつもりもない」

そこで一旦はやては言葉を切った。それは次に出そうとする言葉に悔しさが滲んで、その感情を処理するのに時間がかかっているようだった。

「でも、……できへんのや。やらないんちゃう、できへんのや。さつき言ったようにフェイトちゃんを攫った奴の痕跡はどこにも無いんや。やから、どうやってもこっちから捜査する事はできへん」

そう言い切った彼女の顔には悔しさや歯がゆさがにじみ出ていた。

はやては賢かったから、人より頭の回転が早かったから誰より早くこの事態に気付いてしまった。

そして、いち早く気付いてしまったが故にああ言うしかなかったの

だ。

「ホントにゴメンねはやてちゃん」

漸くはやての行動全てに納得がいったなのはは今度はしつかりと頭を下げる。

「ええよ。ただ今度の休みにデザート奢ってや？」

ちやつかりデザートを奢らされる約束まで取り付けられ、にひひといたずらっ子のように笑いかけるはやてを見てなのははやっぱり叶わないなあとボンヤリ思う。

「まず私らが真つ先に手を付けなあかんのはこの隊長陣の欠員をどうするかや。ここをなんとかせんとこの先、レリックや他のロストログアに関する事件が発生した時にきつとうまく対処できひんようになる。この前のリニアール事件はほんまに運が良かっただけや」

この六課が設立し、その頃から育成を始めたストライカーたちが一度新しいデバイスを手にしたその日ミッドチルダの山間部を走るリニアールが暴走する事件が発生した。

丁度、そのリニアールを使って輸送していたロストログア、レリックを狙ったものだったがこの事件は空をなのはが一人で受け持つて、新人たちに特に被害は見られなかった。

しかし、この機械郡しか現れなかった比較的簡単な事件でさえ新人たちにはかなり危ういところがありはやても肝を冷やしていた。

「とにかく、ライトニング分隊の欠員をはよなんとかせなあかん。みんな何かいい案あるか？」

そう言ってみたもののなかなかフェイトの代わりの人物など思い浮かぶはずもなく、早くもこの会議は暗礁に乗り上げたに見えた。

「ちょっといいかしら？いい人物知っているんだけど？」

しかし、そんな会議室に新しい風を吹き込む、皆には聞き覚えのある第三者の声が響き渡った。

その声は迷走していた会議に弾みを与え加速していく。

「……リンディ提督！？」「」

なのはたちは一様に驚きの声を表す。

関係者によるとその日の会議はかなり遅くまで続いたという。

第一話〜私たちのこれから〜（後書き）

閲覧ありがとうございます。アドバイスは受け付けていますが、筆者は豆腐メンタルなので酷評は勘弁してもらいたいです。

間章「あの日」(前書き)

どうか見てやっってください。

間章くあの日く

かくして私は努力の甲斐あって発着所へと無事時間内にたどり着いた。

「フェイトさん、おはようございます。今日はいつもより遅いですね」

遅刻しなかったことに胸をなでおろしている私に向かって言葉が投げかけられた。

投げかけた人物はシャリオ・フィニーノ、私の数少ない友人の一人であり、執務官である私の副官でもある。

「うーん、ちょっと寝坊しちゃってさ。ごめんねシャリー」

彼女はほんとに管理局の人間にしてはとても珍しい人種だった。

私の経歴を知ったうえで母さんの使い魔であるリニスによって作られたバルディッシュに強い関心を示し、どうにか解体させて分析させてくれと頼みこまれた時には本当に困った。

「フェイトさんが寝坊なんて珍しいですね、もしかして気になる男の子でもできましたか？」

「いったいどう考えたら私の寝坊とそれが繋がるのよ。残念ながらほんとにただの寝坊だからね」

ちえーといいながら彼女は口を尖らせる。

そんな愛らしいしぐさも彼女だからと流せてしまっあたり彼女の人当たりのよさが伺えるのであろう。

そんな彼女が唐突に真面目な顔をして言葉を発した。

「それよりほんとにいいんですか？副官を連れずに任務なんていつて？」

そうなのだ今回の任務で私は彼女を連れて行かないつもりなのだ。だから今日ここに彼女がいるのは出発前の最後の私のデバイスチェックのためなのだ。

しかしこんなことは昨日のうちに終わらせてしまえばいい話で当日にしかもわざわざこんな発着所でやる話でもないのだ。

しかし彼女曰く「私がフェイトさんの見送りをしないでどうするんですか！」だそうだ。

こうなってしまうた彼女を止める手段を私は持たないのでこんなことになってしまっている。

「いいんだよシャーリー。どうせあのラングレン執務官の請け負う予定だった任務だし、一人でも問題ないって」

「うー……フェイトさんがそういつたら私は何もいえないじゃないですかー」

ジト目になりながらこちらを見つめるシャーリーに流れるように言葉返す。

そう、これは元々他人の任務なのだ。

ラングレン・コーハイド執務官、ミッドチルダでも有名な名家の生まれで典型的なお金持ち。

派手好きで、こんな調査隊の護衛といった地味な任務は立場の弱い新人達に金に物を言わせて押し付けるのである。

私は先のような身の上でとりわけ立場は弱い。

だからこんな任務もほぼ毎日のように請け負っているのだ。

「だからごめんねって。帰ってきたらロワのスイーツおごるからや」

「！絶対ですよ！約束ですからね！破ったら承知しませんよ！よしじゃあ早速メンテナンスです！」

なにやら墓穴を掘ってしまったがまあいいだろう。

とりあえず今日はこの任務を終わらすことに集中しよう。

間章「あの日」(後書き)

もう既に原作崩壊しています。この先どうなることやら……

第二話〜変化する日常〜（前書き）

完全オリジナルに突入。批判が怖いです。

第二話〜変化する日常〜

「ねえねえ、ティアア！」

「何よ？」

機動六課の隊舎廊下で人懐っこい笑顔を浮かべた青髪の女性が隣を歩くオレンジ髪の女性に尋ねる。

笑顔だけでこちらも幸せになれそうなオーラを放つ青髪女性に対してオレンジ髪の女性はまさに不機嫌だといわんばかりにむすっとした表情である。

「フェイト隊長の変わりに来る人って誰なんだろうね？」

「はあ……そんなの私を知るわけ無いでしょ？そういう情報だったらアンタの方が早く持つてるんじゃないの」

そんなやり取りをしながら2人が今日向かっているのは数ヶ月前に部隊長であるはやてが挨拶をしたホールである。

元気な蒼髪の女性、スバル・ナカジマが仕入れた情報によるとどうやら六課設立時から意識不明状態のライトニング分隊長、フェイトの代役が遂に決まりその御披露目であるという。

盛り上がっているスバルと対照的に隣を歩くオレンジ髪の女性、ティアアナ・ランスターの表情は優れない。

「……どうせ才能に溢れた誰かよ」

「ん？何か言った？ティアア」

ティアナが自嘲気味にぼつりと呟く。

幸いにその呟きは隣を歩く親友には聞こえなかったようで、件のスバルは首を傾げ頭の上に疑問符を浮かべる。

「ほら、バカスバルもう着いたからシャキツとしなさい！なのはさんに見つかつても知らないわよ？」

「えっ？あつ！」

どうやら雑談をしているうちに集合場所に着いたようでそこにはもうかなりの人数が集まっていた。

「ティアナさん、スバルさん！こっちです！」

「エリオ！キャロ！」

ティアナたちが自分の場所を探していると最前列に自分たちと同じフォアードのエリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエを見つけ駆け寄る。

「まったく、何なのよこの人ばかりは！」

「こんなに六課に人居たっけ？」

スバルとティアナは改めてこの場所に集まった人ばかりを見てそれぞれの感想を口にする。

「聞くところによると保有戦力制限ギリギリのエリート部隊に配属される分隊長代理がみんな気になつてゐるみたいですよ」

キャラがそんなことをいい2人はよく人だかりを観察する。

「そう言われればマスコミの姿もあるわね……全く誰が許可を出したんだか」

本来、軍に近い性質を持つ管理局の敷地内にマスコミなどの一般人は入れない。

それにもかかわらずこんな所にまでマスコミがいるということはこの途中編入にはそれだけの意味があるのだ。

「あ、そろそろ始まるようですよ」

エリオの言葉で二人が視線を壇上に戻すと壇上には部隊長のはやてと白髪の女性が立っていた。

「皆さん、部隊長の八神はやてです。この度はお集まり頂きありがとうございます。早速ですが、紹介させていただきますこちらがライトニング分隊長代理のアルセイド・シュミッターです」

そう言うとはやては一步退き代わりに隣にいた白髪女性のアルセイド・シュミッターが一步前へでた。

「……アルセイド・シュミッターです。……ランクはAA、以上」

「シュミッターは話すのが苦手なので質問は私が答えます」

本来はやては人を呼び捨てにする事は余りないためそれをするということはこの場がそれだけ重大な意味を持っているということである。

それからあとは特にこれといった騒動もなく解散の流れとなった。しかししつかりと午後からの訓練はあるようでフォワード4人組は昼食後13:00に訓練場に集合と言い渡された。

「じゃあ皆、準備はいいかな？」

なのはがそういうと4人組は一樣にうなずいた。

訓練場に集合したフォワード陣に与えられた指令は今からアルセイドとなのはを相手に模擬戦をするということだった。

ライトニング分隊副隊長シグナム曰く剣と剣で語りあえば他に言葉は要らないそうだ。

どうやらなのは達はアルセイドと顔見知りのようでノリノリで準備を進めていった。

「いくで、模擬戦開始！」

はやての声と共に六課の隊長陣二人対フォワード陣という異色の模擬戦が幕をあけた。

「いつも通りスバルとエリオのツートップで行くわよ。後ろは気にしないでいいから思いっきりやってきなさい！」

「了解！」

空にスバルのウィングロードの青い軌跡が奔る。スバルとエリオが弾丸のようなスピードで目標のののに向かって一直線に迫る。

(……………なのは、左足を引いて)

「「え？」」

てつきりなのは売りの一つである分厚いガードによって阻まれると思っていた二人は紙一重で攻撃の届かない位置に入り込んで自分達の攻撃を『避けた』なのはに面を食らった。

「バカ！二人とも回避！」

ティアナの声で呆然としていた二人の意識がようやく戻ってくるがもう既になのはは動き出している。

「マズッ！」

「ああっもうっ！歯を食いしばりなさい！」

なのはお得意の砲撃魔法が間をおかず放たれる。

「へ？ティア？きゃあ！」

間一髪、キャロがバインドで二人を捕縛しティアナの魔力弾ではじき出すという荒業でもってスバルたちは桃色の砲撃が真横を通り過ぎていくのを肌で感じながらスバルたちは回避に成功した。

「……人は自分の想像を超えたことに直面するとまともな判断ができなくなる。……攻撃が避けられた位で驚いてたら駄目」

「アルちゃんの言う通りだよ。この位予測しなくちゃ」

紙一重で難を逃れたスバルたちになのはたちから指摘が入る。

「……なのはもあの位自分で避けて。今のが一撃必殺だったら死んでた……」

「にゃはは……ごめんアルちゃん」

「……謝るだけじゃ駄目。明日から特訓」

がーんと音が聞こえてきそうな程ショックを受けるのは。

「アルちゃんの訓練……」

アルセイドをよく知らない新人達は意味が分からないといった感じ
でそのやり取りを啞然としながら見つめる。

「……ほらみんな見てる。模擬戦はまだ終わってない」

「「「「！」「」」」」

その言葉が聞こえたたんなのはがぐりんと顔をフォアード陣に向ける。

「あ、あの！なのはさん？」

スバルが異様な雰囲気を感じてなのはに話しかける。

「……なの」

「はい？」

しかしなのはから返ってきたのはぶつぶつとした眩きだけ。フォアード陣の感じる嫌な予感が加速度的に高まっていく。

「4人をきちんとせんめつ教導出来ればアルちゃんもきつ……」「散開！早く！」「」

怪しげな雰囲気を感じたティアナが叫ぶが早いかなのはが唐突に砲撃をぶつ放した。

「けほつ無事な奴は返事しなさい」

砲撃によって倒壊した建物の土ぼこりの中からティアナが皆に呼びかける。

「ティア、なんとか無事だよ」

しかし視界を覆う土ぼこりの中からティアナが聞いたのはスバルの肉声だけだった。

「エリオとキャラ口は……駄目ね。念話も通じないわ」

「ティア、いったいどうするの？」

土ぼこりの向こうから聞こえるスバルの声にも明らかに動揺が見られる。

「まったく……凡人にはきついわねえ。聞きなさい。もしこの模擬戦がいつもと同じものなら例え勝てなくともどこかに及第点となるポ

イントがあるはず。まだそのポイントは分からないけど精一杯なのはさんに一撃当てれるようがんばってみましょう」

「うん」

そういつて二人は土ぼこりにまぎれて姿を消した。

「……落ち着いて」

その頃空中ではアルセイドがデバイスでなのはの頭に鈍い音を響かせていた。

「……うう」

「……落ち着いた？」

「はい」

「じゃあ状況の整理。これはあなたの教え子達の実力を測るための模擬戦、あなたが暴れてボコボコにしたんじゃ意味無い」

「はい」

アルセイドの言葉に答えるほど、どんどんなのは小さくなっていく。

「はあああああー！」

しかしアルセイドの説教を掻き消す程の雄叫びが響く。

見れば土埃から蒼い軌跡を引きながらスバルが突撃してくる

「なのは、迎撃」

アルセイドに促されなのはがスバルに向けて砲撃を放つ。

「！」

が、スバルはそれをすれすれで避ける。

「おおおおおおおおお！」

砲撃をすり抜けたスバルはあっという間になのはに肉薄する。

右腕を引きりボルバーナツクルが目に見えて分かるほど回転数を上げていく

「ッ！」

その右腕が突き出されるぎりぎりでなんとかなのははシールドを張ることに成功する。

「そこッ！」

間髪いれずティアナの射撃魔法が突き刺さる

他ならぬスバルに向かって

「ティアナ！？何やって……！」

しかしそんななのはの咎める声は目の前の現象を見てあっという間に消えていった。

今シールドで受け止めていたはずのスバルの姿がぐにやりと歪んだのだ。それに気づけばシールドから伝わる重さが消えているのだ。

「幻影！？ちがつ……これはっ！」

ぐにやりと歪んだスバルの幻影が炸裂した。

（スバル、あとよろしくね）

スバルの耳に最後の念話が聞こえる。おそらく魔力を全て使い切つて気を失ったのだろう親友を思いスバルは最後の突撃を敢行した。

それが彼女の取り柄であり持ちえる最強の武器だったから。

「うおおおおおおおおお！」

「……うん。威力も連携も期待以上。ただ、無茶は時と場合を考えて」

そんな白髪の少女の言葉が聞こえたのを最後にスバルは完全に意識を失った。

第二話〜変化する日常〜（後書き）

The やりたい放題。反省はしています石投げないで

問章 〓 〓 〓 (前書き)

欠方ぶりの投稿すみません。

もし気に入られた方がいらっしやいましたら幸いです。

間章 2 ～そして～

「では、案内のほうよろしく願いします」

その後、シャーリーに見送られ数時間後に私達件の管理外世界ツイシュトロームで現地の人に遺跡への案内を依頼していた。

元々この依頼、というか調査隊護衛なんか執務官の本来の任務ではない。

しかし今回は少々特殊で、最近多発していた広域次元犯罪事件、その首謀者達がアジトに使っていたのがこの遺跡なのである。幸いテロリスト達は全員拿捕され法の裁きを受けた。

つまりは事後調査の私のおまけとして管理外世界の遺跡ということでも未知の何かがあるかもしれないので調査隊が派遣されたのだ。

この調査隊は私となのはの共通の友人、そしてなのはにとっては特別な人であるユーノ・スクライアに直接指示を仰いだ面々であり比較的私に対しても友好的であった。

「ここです」

現地のガイドが樹海の奥深くに作られた遺跡の入り口で立ち止まる。

「ありがとうございます。ではまた時間になったらよろしく願いします」

そういつて現地のガイドを一旦開放する。

一応バルディッシュユにここまで道筋はログを取らせたから最悪時間になってガイドが現れなかったとしても何とか帰還できるだろう。まずサーチャーを飛ばし中の構造を把握し、私はテロリスト達の作戦室となっていた神殿のような広い空間を調査することになった。

他の調査隊の面々はここで状況をオペレートする人などに別れ、手分けしてこの遺跡を調査し始めた。

細長い通路を歩きながら私はこの遺跡について考える。

「土着の宗教、そして次元世界に広がっているカルト教団の聖地か」
この場所は資料によると2つの性質を持つらしい。

一つは渦中の拿捕されたテロリストたちが信奉するカルト教団の聖地。

もう一つがこの世界に9割の支持を持つこの世界特有の宗教の聖地である。

テロリストたちが言うには各テロリスト達のリーダーの頭に一齐にこのイメージと天啓のような使命が与えられたというのだ。

まあ、聖地とはいえ遺跡のある場所が原生林の奥深くであり、たとえ魔法を用いたとしても発見することは容易ではなく、信者達もつばら方向を拝む程度だったらしいのだが。

幸運にもあのテロリスト達は発見に成功し根城にしていたようだ。

「1111は？」

そういえばカルト教は全ての世界の人類の救済を謳っているらしい。……とまたしても考え事をするうちにかなり遺跡の奥まで入ったらしい。目的地の神殿はあと少しみたいだが、今私が目になっているのは普通の通路の壁である。特に何の文様も描かれていない壁面だった。だが私にはナニカ、そうナニカ妙に引っかかるものがあった。

「！」

何かに導かれるようにその壁面に手をかざしてみるとかざした手を

中心に文字が現れ始めた。

ほんの数秒で壁一面に文字が広がり不気味な雰囲気を映し出した。私は実際に壁に手を触れてみる、すると全く見たこともないはずの文字のはずがその内容が私の理解できる言葉でもって頭に響いてくる。

驚いて壁から手を離すと今まで頭に浮かんでいた言葉は消えてしまふ。

どうやらこの壁に接している間だけ聞こえるようだ。

「神の雷によって全てを失ったもの達がここに記す……」

なにか遺跡が振動を始めたようだが私は言葉をそらんじること以外禁止されたようになってしまっていて他の行動が取れない。

バルディッシュが五月蠅く私に警告しているようだがその言葉が理解できない。

異変を感じていつの間にか私の元に集まってきた調査員達がうわごとのように言葉を発する私を見て目を白黒させる。

「その日、我々は全てを失った。その日は我々にとって、人類にとって革新的な……」

私は頭の中に響く言葉に導かれるように書かれている文字を紡ぎ続けた。そこに書かれていたのは衝撃の真実、しかし

「……ッ！」

文字を全て紡ぎきった瞬間私達の視界は白一色に塗り潰された。

そんな中で私の頭には遺跡内に何か解放されたことをどこかで感じていた。

間章 2 々そして (後書き)

完全オリジナル祭り。ドウシテコウナッタ

第三話〜始める日々（前書き）

最近ちょっと更新が楽しくなったネジです。

まあいつまで持つか分かりませんが、よろしくお願いします。

第三話　始める日

あの日の顛末をスターズ分隊副隊長、ヴィータはいまさらながら振り返っていた。

あのはやて発の無茶苦茶な模擬戦は結局、アルセイドがスバルを撃墜して終結した。

なのはたちが一瞬ヒヤッとさせられる部分もあつたが結局撃墜されてしまったスバルたちにはアドバイスが言い渡されその日は解散となった。

そしてヴィータの思考の対象はアルセイド個人になっていく

その後、彼女は隊長不在のライトニング分隊の隊長に任ぜられた。

そして彼女の希望により通常の業務と合わせてオーバーワーク気味だったなのはの負担を減らすために新人教導の番外コーチとして教導を開始した。

いわばマスコットと言うような容姿のアルセイドはすぐに機動六課に溶け込んだ。

……と、いうより周りの人達に無理やり取り込まれたようだったが。

まあそれはともかく、仕事については流石なのはの先輩。

腕は確かなもので通常業務は勿論の事、教導においても新人達はメキメキと実力を伸ばしていた。

……ただ独りを除いて

そんなことを考えながらヴィータの思考は彼女の編入以来ずっとある感情に移っていく。

それは

【不信感】

そこはかたなく漂う不気味さ、猜疑心にも似たこの負の感情をヴィータは彼女に感じていた。

理性で疑い本能が危険だと語りかけてくる。

そんなヴィータの理性が判断する疑問、それは彼女の強さだ。

先の模擬戦、なのははスバルの一撃を完全に紙一重でかわした。ある程度は改善されたとはいえ基本的になのはは運動音痴である。聞けばなのははアルセイドの指示によって動いただけだと言うがそれは口にするほど簡単ではない。近接格闘で相手の攻撃を避ける指示を飛ばすと言うことは、指示を飛ばした先が指示動作をこなす時間、三次元的位置を把握すること。それに加えて相手の動きを完璧に見切らなければならない。そんな

事を出来る人物が何の噂にもならないのはおかしいのだが……

あの隊長会議のときにリンディ提督の推薦。

かつ腕のたつ人物だという事だったが、実物を目に見れば強さと噂が釣り合わない。

どうも不信感が拭えない……

「……ヴィータ！何を呆けている。間もなく始まるぞ」

シグナムの凜とした声にハツとしながらヴィータは視線を訓練場のほうへと戻す。

そこにはスターズ分隊による模擬戦が始まるうとしていた。

「……いい顔、あの二人」

不意に隣に立つアルセイドが声を上げヴィータは釣られるように彼女を見た。

彼女はあの模擬戦の後に彼女から正式に自己紹介があった。

口下手で口数が少ない彼女が語ったことは自分はその教導官としての先輩であることと魔導師としてのランクはAAということだった。

「……やっぱりあたしは納得いかねえ」

そう呟いたヴィータの独り言は誰にも拾われる事無く風に消えていった。

舞台は模擬戦場へ移る。

開始のブザーと共に動き出したのはスバル。

「やあああああああ！」

自身の稀少技能、ウイング・ロードを展開し、青い軌跡を残しながらスバルはなのはへ疾走する。

しかし、幾分正直すぎる

「軌道」も「攻撃」も

当然、防がれる。

反撃にあつ。

「駄目だよ！スバル、そんな危ない軌道！」

てつきり自分に向かってきたスバルは幻影だと思っていたのはは、
為す術なく吹き飛ばされるスバルを見て驚く。

そして同時に脳裏にドス黒い感情がざわめく

その感情が徐々に自分を覆おうとするのを感じながら、なのははそれを上回る肌のざわめきを感じ、振り返る。

これは、魔力の高まり

ダレカが砲撃魔法を撃とうとしている。

ぐりん、と首を回し振り返った先には予想通り教え子のひとりが収束砲を放とうとしていた。

ドス黒いざわめきがさらに大きくなる。

「っ！」

砲撃に対し即座にそれを大幅に上回る魔法を準備仕出したなのはを見て、思わずスバルが息を呑む。

収束させる速度、密度はなのはが圧倒的に上。
後出しの筈の収束砲はもはや発射寸前の様を呈していた。

一方、ティアナの収束砲の完成度はいいところ6割、皆完全になのはの勝利を確信した。

ただ一人を除いて。

誰に話すでなく彼女は言葉を紡ぐ。

「彼女には意思がある」

「意思の力は他人にはどうしようも出来ない」

アルセイドが言葉を紡ぎきった瞬間、異変は目に見えるカタチで現れた。

「ッ！幻影！」

収束砲を撃とうとしていたティアナの姿がぶれ、掻き消えた。

幻影魔法

自身を凡人と蔑む彼女が唯一他人に誇れる技能。

自身と寸分違わぬ見た目を持つフェイクシルエットを精製し相手を攪乱する。

そんな彼女の得意魔法が今、師を相手に完璧に決まった。

「本体は!？」

予定外にうるたえるなのに対して、周りから観察している者にとつては一目瞭然である。

「……上」

気配に気付いたなのはが上を見上げると。

ティアナに意識が完全に移った後に引き直したであろうスバルのウイング・ロードを駆け上るティアナの姿。
その手に握られているデバイスから伸びるのは魔力刃。

「バリアを切り裂いてフィールドを突き抜ける！」

一撃、必倒！

タンっ、と駆け上がっていたティアナがウイングロードを蹴り、自由落下を開始する。

もちろん魔力刃を携えて。

脳内物質の影響か、ゆっくりと自分へ向かって落ちてくるティアナを眺めていたなのははついに

ドス黒い感情に身を委ねた

「……レイジングハート、モードリリース」

「あ……」

ティアナの口から情けない声が漏れる。

自分の積み上げてきたものはあっけなく否定されてしまった。

徐々にティアナを絶望が支配する。

なぜなら、なぜなら、ティアナの真正銘全力の一撃は

素手によって阻まれてしまった。

もはや魔法なんて必要ないとばかりに、素手でティアナの魔力刃は受け止められてしまっていた。

「……練習ではちゃんと言うこと聞いてるフリをして、本番でこんな無茶しちや練習の意味無いじゃない」

静寂が支配する場所に感情を無くしたなのは声がやけによく響く。

「……私の教導そんなに間違ってる？模擬戦は喧嘩じゃないんだよ？」

絶望にほとんど支配されかけたティアナ。

彼女にとって今の出来事は紛れもない現実で

でも、絶対に認められなくて

やったことは、

受け止められてる魔力刃を消し、距離をとる。

「私は、誰も傷つけないから！失いたくないから！」

ティアナは涙混じりに砲撃のチャージを開始する。

悪あがき……

「……少し頭冷やそうか？」

しかし、なのはの心にその言葉は届かず、砲撃魔法が放たれる。

「……それ以上は駄目」

アルセイドがなのはとティアナの間に割ってはいる。

「……なのは、それをティアナに当てたら、あなたはもう教導官じゃない」

「……どうして……」

ドス黒い感情に飲み込まれたなのはは止まらない。

さつきよりさらに魔力をさらに込めた砲撃魔法の準備を始める。

「……ティアナも、プロなら認めて。もう子供のままじゃ駄目」

「……はい」

そんななのは様子なんてお構いなしにアルセイドはティアナも嗜める。

「ツ！アルちゃん！」

我慢の限界だったのかなのはが砲撃をぶっ放す。

が

「……感情が出すぎ、魔法が荒い」

アルセイドは小さな誘導弾を出し砲撃の魔力塊にぶっつける。すると、あっという間に魔力塊は自壊し、霧散する。

「……フェイト・テストロツサがさらわれて、焦るのも分からなくない」

でも、とアルセイドはなのはに語りかける

「……人に当たるのはよくない。それが教え子ならなおさら」

心の奥で思っていたことを言い当てられて、なのはの頭は冷水をぶっ掛けられたように冷えていく。

「……ティアナも」

名前を呼ばれ小さく萎んでいたティアナの肩がびくっと跳ね上がる。

「……お兄さんのことに固執することも分からなくない。でも、お兄さんが間違ってたわけじゃない」

「それは、どういう……？」

「……人に絶対はない。肉親なら尚更汚いところは見えにくくなる。気になったら自分で調べたらいい」

今なら、きつと正しい答えを出せるはず。

そう最後に告げてアルセイドは模擬戦の終了を宣言した。

「ッ……グスッ」

そんな六課のフォアードたちが新しい一歩を踏み出し始めた頃、寮の一室で目を晴らし泣き続けている女性がいた。

シャリオ・フィニーノである。

「どうして、どうしていなくなっちゃったんですか？ロアのスイーツ楽しみにしてたんですよ？まだ、話したいこともいっぱいあったんですよ？一緒にやりたいこといっぱいあったんですよ……」

フェイトが連れ去られて一番影響を受けたのは彼女である。

彼女自身フェイトと出会ったのは全くの偶然であった。彼女は一言で表すなら天才、そんな言葉が似合う人間だった。

運動はからきしであったがデスクワークやエンジニアに関しては彼

女にできないことはあまり無かった。

その中でもデバイスには特に秀でた才能を示し、管理局の中でも特に技術力の高かったマリエル・アテンザに指示した。

そして、その師のついで彼女はフェイトと出会った。

彼女はフェイトの中に自分と同じような孤独を感じ取った。

彼女は人当たりもよく嫌われるタイプではなかったが、友達というものは彼女にはあまりいなかった。

どうしてもそこが、天才というもののジレンマだった。

そんな彼女にとってフェイトはまさに運命の出会いだった。

はじめは同類項としてくれる人間がいてうれしかった。

段々彼女に惹かれて行った、その真面目で直向な彼女に

もっと知りたくなった。そんな彼女のことを

そのために彼女の副官になった。

どうしても知りたかった。自分以外ほとんどが敵でもそんなに頑張れるのかを

そんな彼女は今迷っていた。

自分はここにいていいのかを。デバイスマスターは必要だがそれは自分じゃなくてもいい筈だ

そんな彼女に誘いが届く

「?メール?こんな時に誰から……!」

悪魔の誘いが彼女を誘う。

第三話 始める日々 (後書き)

どうでしたか？もう原型って何だっけ状態

間章くっ出会いく (前書き)

少しでも気に入って頂けたら幸いです。

間章 3 ～ 出会い ～

「あなたが、このメールを送ってきたんですか？」

今、シャリオ・フィニーノはミッドチルダのダウンタウン、それも路地裏にいた。

時間はスターズ分隊による模擬戦の後。

日も落ちた時間帯、そう言えば出掛ける寸前、六課ではアラートが発令されていたような気もするが、それごとくでは彼女を阻むことは出来なかった。

ここは比較的治安の悪いところである。

しかもさらに人の目に付きにくい路地裏ときたら、女性である彼女はなにをされてもおかしくない状況だった。

が、彼女にはいまそんなことを考えている余裕は無かった。

それは、ひとえに目の前にいる人間のせいだった。

全身黒尽くめの服、深くかぶったフード。

そしてその隙間から見える無機質な仮面。

それは間違いなく、病院からフェイトを連れ去った人物であった。

「……メッセージは届いたようだな」

「質問に答えて下さい！」

声色から察するに相手は男性……

しかし、シャーリーにはそんな相手の情報も関係無かった。

それよりこちらの言葉を無視する様子がシャーリーの神経を逆撫でする。

思わずシャーリーが声を荒げる。

「……」

仮面の男がおもむろに手を横に翳す。

すると

ピシッ

何かがひび割れる音がして空間が割れる。

そして

静かに

現れた

シャーリーが夢にまで見た彼女が

……目の前の男とほぼ同じ様な格好をして。

「！フェイトさん！」

でも、そんな事にすらシャーリーは気付かなかった。目の前に、手の届くところに、彼女がいる。

それだけで充分だった。

「やあ、シャーリー久しぶりだね」

思わず飛びついたシャーリーにも彼女、フェイトは嫌な顔一つせず、以前と同じように微笑んだ。

ただ、それだけでシャーリーは満たされた。

「本題に戻ろう」

不意に響く男の声。

シャーリーは一気に現実に引き戻される。

名残惜しそうちにフェイトから離れ、今度こそ男と対面する。

「私はメールの送り主たる証拠を示した。次は君の番だ。答えを聞かせて貰おう、シャリオ・フィニーノ」

男の声の響きは深く、シャーリーに突き刺さった。

「私は……」

彼女は決断する。

それが今後どのような意味を持つか知った上で。

物語ははずみをつけ加速している。

大きなうねりを伴って動き出した運命は少女達を飲み込んでいく。

第四話　〜加速〜（前書き）

どンドン物語りは俺ルールの無法地帯に

第四話〜加速〜

あの模擬戦から数時間の時が過ぎた。

あの後アルセイドに諭された二人は糸が切れたように仲良く意識を失った。

六課の医務官、シャマルによると
ティアナは魔力切れ、なのはは心的な過労だそうだ。

そんな盛大な無茶をやらかした二人はまだベッドの上だ。

日はとつくに沈み、時計の針はもう直ぐ夕食時を指そうとしていた。

「うーん平和や……こんなデスクワークさえ無かったならな！」

バサツと手に持っていた書類を叩きつけはやてが吠える。

ここは六課の隊長室。

普段と比べて見た目3割増しの書類がはやての机にはあった。

その書類の内容と言うのが、

「うー、大体が今日の魔力光についての説明を求めるものです。しかも一つ一つ丁寧にイヤミがデコレーションされてるです……うう」

という事だった。

今日の模擬戦でなのはが暴走したお陰で

六課の訓練所の方向から物凄い魔力光が何回かに渡って空に放たれたという目撃情報が多数寄せられ、その説明を隊長は迫られたという訳だ。

「ご丁寧にイヤミ付きで

でもはやては全く納得出来なかった。

「あたしが何したっちゅうねん！あたしは模擬戦許可しただけや！理由？そんなもん当事者に聞けやー！」

「そうなのだ。」

今日の模擬戦はスターズ分隊の新人達の成長を見るためという目的で申請され、そして許可を下しただけなのだ。

それがあんな大暴走に繋がるなど考えてもいなかったのだ。

そんな大荒れの隊長室に緊急を知らせるアラームがなる。

「なんや？何事や！」

敵襲です。

と、はやてはが言っのより早いかロングアーチから通信が入る。

「数は？種類は？」

流石は隊長、すぐさま指示を飛ばし状況を整理し始めるはやて。先程まで悪態をつけていた中間管理職の面影はない。

「……なる程、数は多数に種類は飛行型ガジェット。完全に偵察、データ収集が目的やな」

短時間の間にはやては結論を出す。
そして、すぐさま部下に指示を飛ばす。

「機動六課隊長陣はヘリポートに集合。尚、フォアード陣は各自待機」

ここまで必要とした時間は僅か数十秒である。

この頭の回転の早さが彼女を隊長へと押し上げた要因の一つである。

時間は数分後、場所は移り機動六課ヘリポート。
良くも悪くも隊長陣が【全員】集合していた。

「なのはちゃん、ハウス！」

「ふえ！？はやてちゃん、私犬じゃないよ！」

そう、何故かつい先程までベッドの上にいたなのはまでいるのだ。シグナムもヴィータもまたか、と言った感じで呆れ果て溜め息をつけていた。

「……なのは、あなたはまだ万全じゃない。それさえ解らないなら犬以下。だから、ハウス」

「アルちゃんまで！只でさえ人が少ないのにこれ以上人をへらし…」

「嘗めるなよ高町！」

未だ子供のように駄々をこねるなのはをシグナムが一括する。

「そーだぞなのは、あんな鉄屑あたしらでじゅーぶんだぜ！それよりお前はティアナの面倒をちゃんと見とけ！」

それに続くようにヴィータがたたみかける。

そして、ようやく

「……わかった」

なのはが折れる。

とほとほと隊舎に戻るなのはを見て、隊長陣はまるで子犬のようだと苦笑してへりに乗り込んだ。

なのはが隊舎の入り口に入ると、なのははそこで待機していたフォアード陣の視線を一斉に向けられた。

思わず、うっと仰け反るがこのまま止まっても仕方ないと結論を出しフォアード達の所へと向かう。

「ティアナ、時間ある？」

そして、案の定自分と同じくベッドから抜け出して大目玉を食らったであろう、教え子に話し掛けた。

「はい、大丈夫です。待機シフトから外されましたから」

目の端に涙を浮かべるティアナを見て、自分の推理が間違っただけで無かった事を確信するのは。

「じゃ、外出よっか」

なのはティアナを伴って外に出て海岸沿いを歩き始める。すると隊舎に近い海から吹く風が2人を撫でる。

歩きながら2人はその心地よさに目を細めているとまずなのはが口を開く。

「模擬戦、ごめんね。ティアナの気持ちも知らないで暴走しちゃって」

「いえ、無茶をした私にも非はあります。こちらこそすみませんでした」

お互い、少し頭が冷えたのか先程の模擬戦で悪かった事について謝る。

「ねえ、ティアナ。私がどうしてこんなにも無茶をさせたくないのか知りたい？」

「それは……知りたいです」

ティアナは少し迷って答える。

暗闇のせいではなののは顔は見えなかったが、なんとなく声に暗い物を感じたからだ。

「私の出身世界は知ってるよね?……」

ポツリポツリとなのはは言葉を紡ぎ出す。

その内容はティアナにとって衝撃的だった。

なのはが9歳の若さで魔法の力を手にして、殆ど何も解らずに戦った事。

その時戦ったのがライトニング分隊の本来の隊長、フェイトであること。

そしてその直ぐ後に起きた闇の書事件でヴォルケンリッター達と必死で戦い、その時にまだ安全性が不安だったカートリッジシステムを真っ先に取り込み、その事件を解決したこと。

そして、それらの無茶が祟って墜ちた事。

今の教え子に無茶をさせない教え方のルーツを聞いて、ティアナは考える。

「まだ、ティアナは沢山時間があって、その時間で磨ける才能も沢山あるんだよ。……それをもっと最初に伝えれば良かったね。私は

口に出さなきゃ人には伝わらないって事を忘れてたみたい」

10年前にフェイトちゃんに教わった事なのに

そう最後に占めたなのはの言葉はティアナに響いた。

「……私に、才能？」

絞り出すように、確かめるようにティアナが口を開く。

「そう、才能。私には何の才能か解らなかったけど、そこにあるのは分かった。けど、アルちゃんならそれを生かせる」

だから、あなたのデバイスは1割しかまだ機能をリリースしていないの

言いながら視線をティアナのデバイス、クロスミラージュへと移す
なのは。

そんなとき雲が切れ、月が顔を現す。

お互いの顔を見れるようになってなのはは気づく。

ティアナが顔をくしゃくしゃにして涙を零しているのを。

「……！無駄じゃなかった！私の努力は無駄じゃなかった！」

感極まって、涙も合わさって震える声で呟いた声はティアナの本当の気持ちを映していた。

そんなティアナをその場に座らせて、なのはは彼女を抱きしめた。

しかし、静寂は唐突に打ち破られることとなった。

（なのはさん！ティアナさん聞こえますか！？）

突如響き渡る悲鳴のようなキャラコの念話。

「どうしたのキャラコ？何があったの？」

（大変何です！シャーリーさんが！シャーリーさんが！）

なのはがいくら優しく問いかけてもキャラコは落ち着く気配を見せない。
そればかりか飛び出した単語になのはもティアナも嫌な予感を覚える。

二人はすぐさま立ち上がり、急いで隊舎へと足を動かす始める。

第四話〜加速〜（後書き）

もう何かね人を選んでる気がする。酷評は怖いけど意見は欲しい。
そんなジレンマ

間章4とある使い魔の吐露（前書き）

ここでも独自解釈満載です。

それとちよっと暗いです。

以上をご注意ください。

間章4とある使い魔の吐露

管理局、本局の一室。

無重力のような上下左右の区別がつかない空間に無数の書架が立ち並び。

ここは無限書庫と呼ばれる空間。

そこで、獣の耳と尻尾を持った女性が物憂げな表情を浮かべていた。

「ふう……」

「どうしたの、アルフ？大丈夫？」

どうやら気づかないうちにため息が零れ落ちていたらしい。

元気が取り柄の私らしくないなと苦笑を浮かべながら、とりあえず心配性な司書長に返事を返す。

「ああ、大丈夫さ。問題ないよユーノ」

私の名前はアルフ。

苗字などないただのアルフ、今管理局の噂になっているフェイト・テスタロッサの使い魔だ。

そしてさっき私に話しかけてきたのはここ、無限書庫の初代司書長ユーノ・スクライアだ。

「本人が大丈夫って言うんなら僕は何も言わないさ」

「ああ、ありがとうユーノ」

そんなことを言いながらも、目はまるで私のことを聞いたそうにしているユーノには悪いが話を簡単に切り上げさせた。

私にため息を吐かせた心配の種は他でもない主人のことだ。

私はフェイトと同じく9年前の事件以降管理局にお世話になっている。

元々は罪の意識もあつたし、なによりその事件で知り合った友人の助けになればいいと思つたからだ。

だからここでお手伝いとして働いていて、いつもと変わらない日々を送っていたのだが、ここ最近大きな変化があつた。

他でもない私の容姿だ。

「まったく何が起こつてんのかねえ？……心配だよフェイト」

ユーノが完全に私の会話を聞ける範囲から去つたのを確認して私は本音を漏らした。

今の私の姿は9年前にフェイトと間違いを犯した時と同じ姿をしていた。

私達使い魔には使い魔として選ばれた時から年齢という概念は無くなる。

使い魔の命はその主と同じ。

主が力尽きれば供給される魔力を失い共に命を失う。

そんな使い魔の命を支えるのは主の魔力だ。
主の魔力を借り受けその量によって力を発揮する。
私は9年前の事件以降、フェイトの負担を少なくさせるためにあまり魔力を消費しない子供の容姿をとり続けていた。
それがついこの前、強制的にこの姿になった。
原因は分かっている、フェイトから供給される魔力量が急激に増加したからだ。

その主は目下行方不明、誘拐されてしまっている。

それが私を悩ませている。
使い魔と主の関係は一方的なものではない。
お互いにやり取りしあうものだ。

だからいつもなら魔力とあわせて高ぶった感情などはかすかに感じることができた。

普段フェイトが感じる辛さも、孤独感もみんな私は知っていた。

でも、私には何にもできなかつた。

私がかしようにしたって、フェイトは微笑みながら大丈夫というだけでそれ以上何もできなくなつた。

しかし、それも今は全く何も感じない。

果たして拉致された先で何かされたのか、自分で閉ざしてしまったのか……

私には全く分からない。

思考は答えが出ないままぐるぐると回る。

「フェイト……こんな難しいメッセージ、私にはわかんないよ」

間章4とある使い魔の吐露（後書き）

感想お待ちしています。

でも、酷評は勘弁して下さい、すみませんひどい作品ってことは分かっています。

でも、書いてるのは楽しいんです。

第五話〜暗雲〜（前書き）

こんな作品でも読んで貰えるなら幸いです。

第五話〜暗雲〜

「うううううわああああ！」

六課の訓練所に少女の叫びが響き渡る。

その数秒後、鈍い音と共に何かが地面に叩きつけられる。

「ッ！」

いたって普通の訓練風景、何の変哲もないいつもの六課の姿

……の筈。

だが、今回は普段のそれとは少し違う所があった。

何しろ【叩きつけた】のがティアナで【叩きつけられた】のがスバルなのだ。

「大丈夫？モロに入っちゃったけど……」

叩きつけた後、ティアナは即座にスバルから飛び退いて安否を気遣う。

スバルは衝撃で肺の酸素が抜けたようで体が酸素を求めて口をパクパクとさせていた。

先程、ティアナがぶちかましたのは技という程の物では無かった。

？相手のジャンプ攻撃に合わせて飛び膝蹴りの勢いで膝から飛び込み

?相手の顔を左足でロツクして右膝を相手の腹部に乗せてそのまま右膝から自由落下

と言う対空組み技もどきだった。

模擬戦の後、アルセイドの師事によってティアナは格闘、特に組み技や投げ技に才能を見いだした。

本来の頭の回転の早さを生かした精密射撃も相変わらずだが、勝負所で切れるカードが増えた事で彼女の幅は劇的に広がった。

司令塔である彼女の幅が広がればフォアード陣自体の戦闘力も上がる。

事実、対なのはの勝率も上がっており、なのはも涙目でアルセイドの師事を受ける事が多くなった。

と、再び訓練所を見ればスバルがゴロゴロと地面を転げ回っていた。どうやら先程のティアナの一撃が余程効いたらしい。

先ほどの状況で普通ならそのまま落下して悶絶は確実だが、そこに魔法が挟まると話は変わってくる。

つまり、元々あの技は落下エネルギーをそのまま威力に置き換える技であるから、そのエネルギーを軽減してやればいい。

それを現実にする手段は魔法を使えばいくらでも存在するのだが、残念なことにティアナとは対照的に魔力の精密操作が苦手なスバルはそれを上手く出来なかった。

結果、今のような惨状である。

しかし多少は軽減に成功したとはいえ、ビル数階分を落下して悶絶

程度で済んでいるスバルの頑丈さには目を見張るものがある。

「ティア〜これじゃ私の耐久試験だよ」

ちよつとは痛みが引いてきたのか地面を転がるのをやめてスバルが口を尖らせ抗議する。

「あんたしか相手がいなんだからしょうがないでしょ。副隊長に喧嘩売るほど命は安くないわよ」

あんたにもいい練習になるでしょ

そう付け加えてティアナは魔力スフィアの精製を始める。

アルセイドの訓練は少々特殊で基本的に指示は最初の一回しか出さない。

そして時間の中で各個人がその指示というか目標の為に工夫を凝らし訓練するのである。

勿論サボったり、意にそぐわない非効率的な訓練をすれば即座に壮絶な制裁が加えられる。

一度、エリオが自身の限界を超えた訓練をしようとしてこの制裁を受けたが、受けた本人も見ていた者もトラウマになりかけたと言う

……

そうこうしているうちにスバルも復活し、二人で魔力精密操作の訓練を始めた。

「うあー……」

訓練を始めて数分、再びスバルが大の字に倒れた。

「まったく！あんたと私じゃタイプが違うんだから同じことやっても意味ないでしょ！」

それを見かねてティアナが自分の訓練を一旦切り上げてスバルの頭をぺしと叩いて横に座る。

見れば、ティアナの真四角に生成された魔力スフィアは一つ一つが均一で立体的な幾何学模様を作り出していた。

「……うん。二人は一旦休憩」

「はいっ！」

いきなり後ろから聞こえた自分達以外の声にびくつとした二人だったが、上司の声と分かって立ち上がり敬礼する。

見ればいつの間にかアルセイドが二人の真後ろに立っていた。

どうやら平行してなのはの訓練も行っていたらしく、彼女らしきこげた物体がアルセイドの隣に転がっていた。

「……いい返事」

そういうとアルセイドはなのは(?)を引きずって隊舎へと戻っていった。

どうやら自分たちが一番遅くまで訓練をしていたらしいことを知って二人が時間を確認すると、時計は丁度12時を刺そうとしている所だった。

「「飯にする？」」

時間を知って急激な空腹感に襲われたティアナが投げやりにスバルに聞く。

「する！」

今までの疲労はどこへやら目を輝かせながら力強く返事をするスバル。

「はいはい……」

ティアナはまさに予想通りの相棒の反応に苦笑を浮かべながら立ち上がる。

そして二人は隊舎にある食堂に向かって歩いていった。

場所は移り食堂。

食事を終えた二人は残った数十分を談笑に費やしていた。

そんな折、ティアナから真剣な顔でスバルへ疑問が投げかけられた。

「……ねえ、スバルどう思う？」

「どっつて……シャーリーさんの事？」

重要な事が抜け落ちた質問にスバルは一瞬面食らうが、思い当たる

節があり直ぐに会話に復帰する。

「そう。あのなのはさんとの模擬戦の後アラートがあつて、隊長陣が出払つてる間にシャーリーさんは病院にかつき込まれた」

「噂によると、フェイトさん誘拐の実行犯に接触したらしいよティアア」

「確かに、あの人はフェイトさんにベツタリだったって話はよく聞くわね。もし、情報収集してて何か掴んだのなら有り得ない話ではないわね」

そこまで話した所でティアナは時計を確認し、

「ま、本人から聞けば真実は自ずと解るでしょ。とりあえず私達はデスクワークをしに行きましょう。ほら、あと5分よ」

「げ……デスクワーク苦手なんだけどな」

「いつまでそんな事いつてんのよ！置いてくわよ！」

「ちょ、ちょっと待ってよティア」

何時もの夫婦漫才を繰り広げ、二人は食堂から出て行った。

「ふう〜〜終了！」

「ったく！いつになつたらあなたは時間通りに、一人で、デスクワークを終わらせられるようになるのよ！」

太陽が完全に沈み込んでから一時間後、ティアナの愚痴が二人以外誰もいなくなつたデスクワーク用の部屋に響き渡つた。

「悪かつたつてティア〜今度何か奢るから勘弁して……」

ティアナは目の前で手を合わせて謝る相棒に溜め息を吐きながら頭を抑える。

「給料一月分は覚悟しときなさい。あと、手伝うのは今日だけよ」

「そんなご無体な〜」

よよよと泣き崩れるスバルを無視してティアナはすたすたと出口に向かつて歩いて行く。

そんなティアナの様子に気づいて後ろをとぼとぼスバルがついて行く。

「この後は特に何もなかつたわよね？」

「うん、緊急事態にでもならなきゃ今日は終わりだよ」

「あんたねえ……縁起でも無いことを言わないでよね。本当に……」

軽口を叩きながら廊下を歩く二人に緊急事態を知らせるアラームが降り注ぐ。

「まったく最悪！スバル、奢りでもう一月分とばしてやるわ！」

「あ、あたしのせいじゃないよ〜」

スバルは理不尽だー！と叫び、ティアナはうっさいと一蹴しながらも二人は足を止めずヘリポートへ向かう。

「ティアナさん！」

「エリオ！」

「えと、私もいます！」

「キャロ！」

先ほどの廊下を曲がった所で二人は同じフォワードのちびっ子二人組に出くわした。

（ティアナ達聞こえるか？）

そんなヘリポートへ向かうフォワードたちの元へ部隊長であるはやてから通信が届いた。

「はい、聞こえています」

（よっしゃ、いい返事や！けど状況は深刻や私も前線で指揮をとるとりあえず正面玄関から外に出てや）

「了解です！」

代表としてはやての通信の返答をティアナが行い、フォワードたちは与えられた目的地へと進行方向を変えた。

「ティア、ヤバいんじゃない？これ」

「ええ。特に私たちの直接の上司のなのはさんからじゃなくはやて部隊長から直接指示がくる所とかね」

通信が途切れたのを確認してスバルが口を開いた。

その顔は真剣、というより深刻といった感じだ。

普段明るいムードメーカーのこんな様子にフォワードたちは言葉を無くし、全員が真剣な表情でただひたすらに歩みを進めた。

「すみません！遅れました！」

「よし、全員集まったな。早速やけど、グリフィス君現状を報告してや」

フォワードたちが正面玄関にたどり着いたときにはもう既に六課の隊長達は全員集合していた。

間髪をいれずにはやてが副官に指示を飛ばす。

（敵の一団は数分前に突然六課の目の前の海上に現れました）

日はとうに落ちきつておりもはや視認はできなかったが、真っ揺らめく黒な水面は何故かティアナたちを不安な気持ちにさせた。

何か今日、大切なものが壊れる

突如襲われた確信じみた予感にティアナは身を震わせた。

（今は数十キロ先をかなりゆっくりとした動きで移動中です。レー

ダーの反応からかなりの数です気をつけて下さい)

その言葉を最後にロングアーチからの通信は途切れた。

「現状はこんな感じや。作戦やけど、まず最初にフォワードたちが前線にでて情報収集と牽制。続いて隊長達が状況に合わせて叩く。」

そこで一旦言葉を切り全員を見渡すはやて。対して答えるように誰もが真剣な顔で頷く。

「簡単な作戦やけど、相手の情報が無い以上どうなるか分からへん。ヤバいと思ったら真っ先に撤退や。幸い敵の移動速度に対して距離はまだ充分や」

特にフォワード、無理は禁物や

そう最後に加えてはやても言葉を終えた。

「じゃ、準備はええか？」

「「「はい!」「」「」

そしてティアナ不安な胸の内は誰に知られもせず、フォワードは正体不明の敵に向かって動き出した。

第五話〜暗雲〜（後書き）

どうでしたか？

感想お待ちしています。

第六話〜急転〜（前書き）

夏休みなのにもものすごく忙しいです。
難産でした。第六話です。

第六話 急転

フォワードたちはひたすらにスバルが作った道の上を走っていた。数十キロを走るのは流石に無理なため途中まではヴァイス操縦のヘリに乗って来たのだが、アンノウンに不用意に近づくのは危険なため残り数キロはフォワード自身に委ねられた。

「その……エリオ君、重くないですか？」

「大丈夫だよ、キャロ」

初め、キャロのフリードリヒに乗って行くことも考えられたが、魔力はギリギリまで温存したほうがいいという意見の元フルバックで比較的体力の無いキャロはエリオがおぶることで足並みを合わせていた。

「もうそろそろね。あんたたち準備はいいわね？やばくなったらフリードリヒで離脱。絶対に全員で帰るわよ！」

「……はい……」

「キャロ、お願い！」

「分かりました！フリード！」

キャロの指示で竜魂召喚されたフリードリヒから頭上に火球が打ち上げられる。

ティアナがその火球に向かって射撃魔法を放つ。

特殊な魔法を内包した射撃魔法は火球に直撃した瞬間火球を爆散さ

せ、夜の空を煌々と照らす。

「これで視界は確保したわって……何あれ？」

暗闇の海上を移動していたのは金属で覆われた四肢を持つヒトガタ。金属同士が擦れ合う音と共にヒトガタの顔らしき部分が一齐にこちらを向く。

数百の顔が一齐にこちらを向き一瞬気おされるフォワードたち。

「……海上を歩いている？」

「どうやらそのようね。これで進行の速度が遅いにも納得がいくわ」

エリオが見たままの感想を口にするティアナがそれを分析する。そう、このヒトガタは海の上を『歩いて』いたのだ。

とは言っても水上を物体が歩くというのは無理なので凍った海上を歩いているわけだが、それをヒトガタが行っている雰囲気は無かった。

「しかも、海上を凍らせているのは別の術者ってことね。気をつけなさい、かなりの力を持った術者が近くにいますわよ！」

そんな中

(うそ……そんな……！)

通信からなのはの狼狽する声が戦場に響く。

「なのはさん!？」

(ちよつと！なのはちゃん！何処にいくんや!?)

無線越しになのはが飛び立つ音が聞こえる。

(ちつ！みんなは勧告をして、最悪の時にはそのまま戦闘に入ってもらつて。グリフィス君はあのアンノウンの情報を探すんや)

はやての鋭い指示が飛びその場にいる全員の気が引き締まる。

「みんな聞こえたわね？キャロはブーストをお願い。最悪の場合はいつも通りにツートップで行くわよ」

「「「はい」「」」

そういつてティアナは行動を開始する。

「こちらは時空管理局です。速やかに武装解除してあなた達の目的を明らかにしなさい。これは警告です。従わない場合はこちらも相応の態度をとらせて貰います」

……

ヒトガタに向かって発信するが、反応はない。
それどころか

……！

最前列の槍を持った中世の騎士のようなヒトガタが槍を構える。

「ッ！散開！」

ティアナが話すのが早いかヒトガタが弾丸のようなスピードで飛び出す。

「ラウンドオ！シールドオオオオ！」

声と共に飛び出したスバルがシールドを展開する。
だが、止められるのは一人のみ。

十人ほどが飛び出し壁のように押し寄せた残りの軍勢はウィングロードに到達する。

「スバル！あなたは動き回って道を作りなさい！」

スバルがとめた一体を魔力弾で吹き飛ばしてティアナが叫ぶ。

「了解！」

敵がいなくなった目の前の大空をスバルが疾走する。
その後ろには仲間たちが戦う場となるウィングロードが展開されていく。

「とりあえず、飛び込んできたこいつらを相手するわよ。エリオ、トップは任せるわよ」

「はい！」

ウィングロードに飛び乗ってきたヒトガタたちが体制を整えている間に臨機応変に指示を飛ばすティアナ。

他のヒトガタたちは参戦する気はないのかいまだ顔をこちらに向け

たまま事を静観している。

「フリード！」

援護としてキャラがフリードリヒに火球を撃たせる。

「ちっ 防御は固いわね……」

ヒトガタたちがその手に持った盾で火球を防ぐのを見てティアナが苦々しげに吐き捨てる。

「うおおおお！」

波状攻撃でエリオが敵へと殺到する。
持ち前の突貫力で敵陣へ食い込む。

「援護するわよ！」

そこにティアナの魔力弾も降り注ぐ。

「とりあえず、一人倒す。スバル、私の上空に道をひきなさい！キヤロは私に筋力ブースト！」

最前線のエリオの頭を越え、ヒトガタ一体に目標を定めて突撃する。

「分かりました！」

「了解だよ！」

ついにヒトガタの目の前にたどり着いたティアナは駆け込んだ勢い

そのままに飛び上がる。

「ビイイイイック！」

飛び上がる時に掴んだヒトガタの頭らしきものを目の前のウィングロードへ叩きつける。

「フオオオオオオル！」

体を反転させ、今まで足場としていたウィングロードに回転を加えてヒトガタを頭から叩きつける。

落下のエネルギーを全て頭部に受けヒトガタは機能を停止させる。

「やっぱり無人……それに弱点は頭部、おそらく人間と一緒にね」

バック転で自陣に戻ったティアナは魔力弾を生成しながら分析する。

「弱点は頭よ。みんなそこに攻撃を集中しなさい」

そして、得た答えを皆に発信する。

残りヒトガタ、ウィングロード上に9、海上に未だ数百。

「ただいま！」

そうこうしてるうちにスバルが帰還しフォワードたちは一斉に攻勢に出る。

「行きます！ストラーダ！」

Ja

まず口火を切ったのはエリオ。
キャロのスピードブーストで一気に加速し、デバイスと一体となつて相手の喉元へ喰らいかかる

「マツハキャリバー！」

All right b a d y

エリオがヒトガタを一撃で下したのを視界の端に留めながら、スバルは自分のデバイスに指示を出す。
マツハキャリバーキャリバーの回転数が目に見えて上がって行く。

「打ち抜けエ！」

スバルは叫びと共に蒼い弾丸と化する。
右腕を引きながら最大の速度でヒトガタに迫り接近した瞬間、右足で踏み込み渾身の右ストレートを叩き込む。
吸い込まれるようにヒトガタの頭部へと伸びたスバルの腕は、真っ直ぐその頭部を突き抜けた。

「残り7、援護いくわよ！」

「ティアナさん危ない！」

「ッ！」

流れがフォワードたちに傾きかけた刹那、ティアナに向かって海上から砲撃魔法が襲う。
キャロによって攻撃を知ったティアナはとっさにシールドを展開する。

「ティアア!？」

後ろの様子を知ることが出来ないスバルから躊躇いの言葉が漏れる。
が、

(振り返らない! あんたはあんたのやるべき事をしなさい!)

ティアナから檄が飛ぶ。

明らかに殺傷設定の砲撃に急拵えのシールドでは荷が重いと判断したティアナは、シールド全体に魔力を供給する事を早々に切り上げた。

そしてシールドを手の周りにのみ集中させ、ころの原理で砲撃を逸らせたのだ。

「でも、援護が始まったとなると分が悪いわね……」

苦々しげな顔を浮かべてティアナがこちる。

「あんたたち、もう良いわよ。データはそれなりに採れたし退くわ……」

「デイバイイイイン・バスタアアアアア!」

ティアナの指示は天上から轟音と共に降り注いだ。ピンク色の砲撃によってかき消される。

「フォワードたち、怪我あらへんか？」

そして、砲撃に少し遅れて到着する夜天の王、烈火の騎士、鉄槌の騎士そして無口な教導官。

機動六課の隊長陣が一堂に会していた。

(データ、ありました！あれは傀儡兵と呼ばれる自立型兵器であるPT事件でプレシアが使用していたようです)

「PT事件……それでなのはちゃんか……」

副官の報告にはやての口から咳き漏れる

PT事件、主犯のプレシア・テストロッサがその娘、アリシア・テストロッサの蘇生を目的としてロストロギアであるジュエル・シードを収集するために起こした騒動である。

その最終局面、虚数空間に浮かぶプレシアの居城である時の庭園に突入したなのはとフェイトを迎え撃ったのが傀儡兵である。

「私とフェイトちゃんの思い出を、汚さないで！」

Divine Buster

暴走するのになすすべも無く蹂躪されていく傀儡兵たち。

なのはの参戦によって戦況が機動六課に傾きかけた、
が

「「「「なのはさん！」「」「」

「これ以上潰されると困るな」

イレギュラーの参入によって戦況はまた変化していく。

「あなたは……」

投擲されたナイフを咄嗟に張ったシールドで防ぎ相手の様子を伺う
なのは。

そのイレギュラーの格好は黒フードを深くかぶり顔は見え、全身
黒尽くめ。

「あなたはア！」

なのははカッと目を見開く。

そう、その姿はフェイトを連れ去った人物の格好と瓜二つだった。

Master!

自分の相棒にたしなめられ、なのはは飛び出そうとしたわが身を無理やり落ち着かせる。

第六話〜急転〜（後書き）

どうでしたでしょうか？

戦闘描写はまだまだ苦手です。

アドバース待ってます。

第七話〜急転〜

闇を照らす桃色の輝きが霧散し、その場にいる六課の面々は徐々に回復する視界の向こうに圧倒的な暴力の爪痕を予想した。

「なんだ……」

が、そこにあつたのは意外な光景。

「来たのか、” フェイト”」

そう、他でもない誘拐された機動六課ライティング部隊の隊長、

フェイト・テストロッサ

が、そこにはいた。

「フェイト……ちゃん？」

誰もが言葉を失い、沈黙が支配する空間になのはの困惑の音が響いた。

「や、なのは久しぶり。1、2ヶ月ぶりかな？」

そんな事を言っただけで彼女は本当に嬉しそうに皆に向かって微笑んだ。

「あ、久しぶり……って！本当にフェイトちゃんなの!？」

「うん。私はフェイト・テストロッサ本人だよ」

そう言って笑うフェイトの顔は先程とは違い、影が差しているようだった。

「何で、こんな所に？」

そんなフェイトの様子に気づかないのか、いや“気付きたくない”のかなのはは質問を続ける。

「何故って」

ヤメロ

茫然と立ち尽くす六課全員の耳に呪詛のような言葉が聞こえた気がした。

「決まっているじゃない」

ヤメロヤメロ

呪詛の言葉が大きくなる。

「私がこつち側だからだよ」

「嘘ッ！」

悲痛な叫びが響く。

認めたくなかった現実

知りたくなかった絶望

全てがない交ぜとなってなのはをかき回す。

「……なのは」

「アルちゃん……」

そんななのはの様子に居ても立ってもいられなくなったのかアルセイドが近づき声をかける。

「ぶっ！」

が、次の瞬間なのはに向かって飛んだのは慰めの言葉ではなく鉄拳だった。

「……落ち込んでる暇は無い」

全く予想外の結末に啞然とする六課の面々を尻目にアルセイドは淡々と言葉を紡ぐ。

「……敵が昔の仲間なら戦って改心させるだけ」

もちろん、交渉はする。

と締めてアルセイドはフェイトの方へ向く。

しかし、事態は更に複雑になっていく。

「あーあ、目が据わっちゃった。私たちは通りたいただけなんだけどなー？」

突然、フェイトの口調が変化する。

「あなた……フェイトちゃんじゃない？」

「半分正解なんじゃない？ 遺伝子的に私とフェイトは全く一緒なんだから」

遺伝子的に全く一緒

その言葉が衝撃となって一同を襲う。

「もしかして……アリシア・テストロッサ？」

「そ、私はアリシア。そしてフェイトは私のクローン」

「そんな！？ あなたは！」

アリシア・テストロッサ

P T事件の主犯、プレシア・テストロッサの実子。

プレシアの主導で行われたエネルギー開発プロジェクト一環であるエネルギー炉、ヒュドラの暴走によって死亡。

肉体はプレシアの手によって保存され、P T事件の最後にプレシアと共に虚数空間に消えた。

「全く、フェイトのふりをしてれば楽に通して貰えると思ったのになあ」

「なら！ 本物のフェイトちゃんは？」

「さあ？私か彼を倒せば分かるんじゃない？」

「ならば、そうさせて貰おう！」

のらりくらりと会話を続けるアリシアにしびれを切らしたのはシグナムだった。

自分のデバイスでアリシアに切りかかる。

「くっ……しゃあない！フォワードと私は傀儡兵の相手をする。残りはアリシアと謎の男の相手を」

転がり始めた状況に矢継ぎ早に指示を飛ばすはやて。
しかし、その顔には余裕はなく苦々しげな表情が張り付いていた。

「なんや……この嫌な感じは」

ポツリとこぼれた指揮官の不安は魔力光が照らす夜の海に誰にも拾われることなく消えていった。

海上、氷上にて

「私も前に上がるわ。さっさと片づけるわよ！」

「了解！」

傀儡兵と戦うフォワードたちは、はやてという強力なバックを得て超前衛的な布陣に展開していた。

「3秒後に砲撃いくで！気いつけえ！」

はやてが砲撃を放ち牽制と共に数を減らし

「打ち抜けエ！」

「貫け！」

「くらつときなさい！」

前衛三人がガリガリ敵の数を減らし前に出る。

スバルは得意のインファイトで体格差をもとめせず殴り飛ばし、エリオはキャロのブーストを頼りにデバイスと共に突撃、そしてテイアナは氷の地面に向かって叩きつける。

一番の問題点であった火力を補う事によって、大幅に戦力を増大させたフォワードたちは15分程で場に展開していた全ての傀儡兵を駆逐した。

「あとは……」

眩き空を仰ぐはやて。

そこにあつたのは魔力光を散らせながらぶつかり合う自らの守護騎士。

そして、桃色の砲撃。

「いつまでそうしているつもりだ……？」

数合の切り結びの後、痛いほどの静寂が包み込んでいる空。そこにシグナムの小さな声が響いた。

声音から読みとれる程の確かな怒気をはらんで。

「んー？特に怒られるような事はしてない筈だけど？」

そういつてアリシアは自分の獲物、大斧を担ぐ。

戦闘の口火を切ったシグナムの袈裟懸けの一撃を防いだのは他ならぬこの大斧であった。

アリシアはこの大斧をあるうことが片手で振り回していた。

「ならば、何故！魔法を使わん！」

最早怒気を隠すことを止めたシグナムがアリシアに向かって怒鳴る。そう、戦いが始まって十数分、アリシアは一度たりとも魔法を使うことは無かった。

ベルカの騎士を名乗る彼女からしてみれば魔法を使わない、つまり全力を出さないと言うことは侮辱と同意であった。

「あー、そーいう事ね」

怒る相手にもかかわらず飄々とした態度を崩さないアリシアにシグナムの怒りは余計に燃え上がる。

「そう言うことだと？貴様にとっては私など本気を出すにも値しない相手だともいうのか！」

「あー……別にそういう意味で言ったんじゃないんだけどな……」

怒り狂うシグナムには苦笑混じりに呟いたアリシアの言葉は伝わらず、虚空へと吸い込まれた。

「フェイト、面倒くさいよあんたのライバル」

轟！

最早会話を諦めたのかシグナムが仕掛ける。横風ぎに払われる魔力を付加し炎を帯びた一撃、それは受けきれないと判断したのかアリシアは回避行動をとる。

次の行動に素早く移るための紙一重での回避。

が

「貰ったア！」

Explosion!
Strange form

アリシアの体が回避へ向かうのを確認した瞬間、シグナムのデバイス、レヴァンティンから空の薬莖が排出される。

そして間髪入れずレヴァンティンの刀身が“伸びた”。

いや、厳密には正しくない。

正しくはデバイスの形状が剣から蛇剣へと変わっただけ。だが、アリシアの目には確かに剣が伸びた様に見えたのも事実である。

結果

「……やるじゃん」

「ふん、お前を戦闘不能に出来なければ意味がない」

熱によって焼けただれた腕を晒し苦々しげに呟くアリシア。

あの時、横風ぎに払われる一閃がしなるように伸びるのを見たアリシアはこの後の戦いで五体全てを使うことを諦めた。

つまり、左腕を諦めた

良くて片腕、悪くて戦闘不能。

そう決を出したアリシアは迫りくる刃に下から左腕を叩きつけた。シグナムのデバイスが鞭のようにそこから変化をするようであれば確実に左腕は体と泣き別れていただろう。

が、実際そうはならず、それがアリシアにとっては幸運だった。かちあげられた刀身はそれ以上変化することなく力なく打ち上げられシグナムの元へ戻っていった。

結果、一撃はアリシアの左腕を焼くだけに終わった。

「あれを避けるとはな。だが、魔法無くして次はないぞ」

「まったく！好きで魔法使つて無いわけじゃ無いんだけど？」

A w a k e n i n g

いつまでたっても平行線な会話にアリシアが少し怒気混じりの声で

そう言うとアリシアの体に明確な変化が現れる。

「漸く本気になったか……フン、それが貴様の鎧か」

「だーかーらーあたしはあんたやフェイトと違って魔法を使えないんだってば！」

ため息を吐きうんざりするように話すアリシア。

その体には金属質の機械的な鎧が展開していた。

顔まで覆う鎧、色は黒、それに所々に金のラインが走っている。

脚部には浮遊装置なのか金色の車輪が回っている。

「何……？」

アリシアの言葉に思わず眉をひそめるシグナム。

「フェイトやあんたと違って私にはリンカーコアが無いの。けど、」

フェイトより弱いつもりも無いけどね。

そう言うとアリシアはシグナムに向かって空を駆ける。

「来るか！」

色々と聞きたい事もあったが、まずはと

強敵と戦えることに喜び、愉悦に顔を歪めるシグナム。

鎧を展開したことによってまた一段と重くなるアリシアの攻撃。

しかし一合、また一合とお互いの武器を交えることによってシグナ

ムの笑みは深くなっていく。

「いいぞ、もつと来い！」

「バトルジャンキーもここまで来たら最早立派だね……」

アーマーの奥でアリシアが苦笑する。

「でもッ！」

一際大きく振りかぶって一撃を繰り出すアリシア。

「ぬう」

先程よりも速度の上があった一撃に目による確認よりも経験による反射で対応するシグナム。

辛うじてガードに成功するものの大きく吹き飛ばされる。

「フッフ、ハツハツハ！楽しいぞアリシア！」

吹き飛ばす体を強引に止め、アリシアに顔を向けるシグナム。

シグナムは攻撃を受けた腕に残る痺れさえも喜び笑い声を上げる。

痛みが始まる戦闘に関わる一切の感覚に歓喜するその姿はまるで、生きながらに神々の戦争での尖兵になること義務付けられた北欧のバーサーカーを思い起こさせた。

「口惜しいがそろそろ終わりにしよう」

更に数十武器を交わした後、ぱつりとシグナムが言葉を発する。

「実に楽しかった！幕を降ろすのも本当に残念だ」

「ま、終わりのない物語は無いからね」

劇の一場面のようなやり取りを交わす2人。

「ああ本当に残念だ。だからせめて私の手で……」

倒される

言葉を待たず場に魔力が吹き荒れた。

デバイスに込めきれず溢れ出したシグナムの魔力だ。

「いいよ、やろうか。ブリッツ！」

Let's roll

対するアリシアも好戦的な笑みを浮かべる。

名を呼び、自らのデバイスに術式を展開させる。

「それが貴様のデバイスの名か！ならば、こちらも！レヴァンティン！」

Explosion!

Bogen form

シグナムがデバイスを蛇剣から弓へ転じる。

そして、全力の一撃を番え、引き絞る。

一連の動作ごとにどんどん空気はピンと張り詰めていく。

「翔けよ隼！シュツルムファルケン！」

もはやキリキリと音が聞こえるほどに空気は張り詰め、そしてシグナムは最後の言霊を乗せその一撃を解き放った。

「やるよ」

ポツリと呟きデバイスを肩に架け、自身に向かい圧倒的な威圧感をもって迫る魔力の矢を正眼に見据えるアリシア。

そして顔の装甲を解除する。

露出する顔、なびく長い金糸。

顔は相手を捕らえたまま動かさずデバイスを振りかぶる。

その様子はまるで引き絞られた弓。

放たれることを今か今かと待っているようで限界まで張り詰めた場の空気をさらに重くする。

「荒れる雷、ヴァールハイト・ドンナー！」

アリシアが口上と共にデバイスを降り抜く。

同時に雷の嵐がシグナムに向かって走る。

そして

シグナムの炎の矢とぶつかり

”何事も無かったように突き抜けた”

「何ッ!？」

自分の持てる最高の技。

今まで破られたことが無い、という訳ではなかったが一瞬たりとも拮抗しなかった事はなかった。

そんな自信を一瞬で砕かれたシグナムは動くことができなかった。

M e i s t e r !

しかし何かを悟ったようにデバイスを下げるシグナム。

デバイスの自身を案ずる声を無視して肩を震わせて笑い出す。

「ククク……見事！楽しかったぞアリシアアアアアアア！」

絶叫とともにシグナムの体は雷の嵐に飲み込まれていった。

「遅いな、高町なのは」

「ッ！うるさい！」

「……なのは落ち着いて」

再び場面は変わり、なのはとアルセイドの二人は謎のリーダー風の男の相手していた。

「狙いも荒い。管理局のエースとはそんな物か？」

「うるさいって言うてるでしょ！」

「……」

戦局は泥沼、フェイトへの手がかりを焦るあまりなのはの攻撃はどんどんと雑になっていく。

攻撃を避け続けられることによりその焦りは加速し、注意を促すアルセイドの声も聞こえなくなっていた。

「そこだ」

「ッ！」

コントロールの甘くなったアクセルシューターの間を突き距離をつめられる。

そして間髪いれずに叩き込まれる掌底。魔力の込められた攻撃だったのか、なすすべなくなのはの体は吹き飛ばされる。

「……なのは、落ち着いて。このままじゃ相手の思う壺」

距離が離れたところでアルセイドが近づき言葉をかける。

「だから、あなたはもう前に出ないで」

なのはにとって衝撃の言葉を。

「そんな！私はまどっッ！」

金切り声を上げるなのはをアルセイドが拳で一括する。

「……攻撃するなどは言っていない」

「……はい」

涙目になるなのはよそにアルセイドは話を続ける。

「……いい、相手はバリアジャケットどころか魔法を使っているかどうかも怪しい」

なら、とアルセイドは言葉を続ける。

「相手を倒すことは難しいと考えていい。そして目的は情報を聞きだすことに絞ればいい」

そのためにはどうするか

「圧倒的に私たちにとって有利な状況を作りだすしかない。つまり、あなたには後ろに下がって砲撃の準備をしてほしい」

アルセイドの真剣な表情に無言で首を振るなのは。

なのはが前線を離れるということは、アルセイドが謎の男の攻撃を一身に受けるということだ。

しかも相手は明らかに格上だと思われる。

油断ではなく余裕、驕りではなく計算で弄ばれていたのかもしれない。

そんな相手に自分よりもランクの劣るアルセイドが前線をかっでたのだ。

おのずとなのはの士気も上がる。

「なんだ、選手交代か」

「……そう」

「魔力量はあちらさんのほうが多いんじゃないのか？」

「……正解、でも負けない」

「なるほど、こりゃ気を引き締めてかないとまずいかもな」

そうして謎の男との第二ラウンドが幕を開けた。

幕が空けた第二ラウンドはとても静かなものだった。

男が撃つ、撃つ、撃つ、撃つ、撃つ、撃つ。

が、アルセイドには届かない。
ひたすらに避ける。

避ける事しかせず攻撃もしない。

故に状況は平行線、お互いに疲労も見えず優勢も劣勢もない。

「……駄目か。ならちよつと趣向を変えてみよう」

不意に男が弾幕を止め呟く。

問いかけに対する回答は沈黙。

了解と受け取ったのか男はアルセイドへ肉迫する。

状況は平行線から微かに動いた。

一本の線が並び走るもう一本の線へ僅かに角度を持った。

一目では分からない変化、その角度。

しかし果てしない時間の後に2つの線が必ず交わる事になる因子。

近接戦に入った2人の戦闘は沢山の戦いを見た教導管のなのからは
見ても異質なものだった。

「何……コレ？」

スバルやシグナムの様に激しくぶつかり合い、デバイスが火花を散
らし怒号が飛び交う分けでもない。

極めて静か

フェイトやエリオの様に眼にも止まらないスピードでたたみかける
わけでもない。

攻撃していない？

お互いにスペースを見つけてはそこに自身を押し込む。
相手の動きに対して更にスペースを埋めていく。

「陣取りゲーム？」

そこには拳打や蹴脚のような野暮ったい動きは全く存在していな
かった。

「ッ！……奪い合っているのは死角？でもそれだけじゃない」

そして、なのはは気づく。

彼らはお互いの死角へ体を滑り込ませている事に。

死角、心の隙間、人の無意識。

自然に生じるそんなスペースに2人は自身を押し込み戦っている。

彼らの戦いを見ているうちになのはは1つ頭の中によぎる言葉があった。

今となってはとても昔のような、彼女が小学生だった時の記憶。

あれは兄だったか父だったか話し手も確かではない。

でも言葉は記憶に残っている。

あれは確か……

「死角を取って」

なのはは呟く。

するとある動きが生じた。

ふとした拍子に男の上体が揺らいだのだ。

見れば彼の頭上にはいつの間にか設置された魔力スフィアがある。

集中したが故の過ち、無意識の戸惑い、それが結実した。

「一撃で決める」

揺らぎを確認したアルセイドの行動は早かった。

生じた隙間に体を入れ、移動の勢いを体重移動と組み合わせ打撃力を上げた肘鉄を叩き込んだ。

綺麗

アルセイドの動きに無意識に息を吐いたなのは。

そんな自分の行動に驚きながら先程のアルセイドの動きを頭の中で復習する。

綺麗

この一言に尽きる動きだった。

一連の動きはたゆたう大河の流れのようで見たものを魅了する不思議な魅力があった。

一切の無駄のない動き、それが抜群の観察力“のみ”に優れたアルセイドの強さだった。

「……」

吹き飛んだ相手を正眼に捉えたままアルセイドは空中に静止していた。

アルセイド自身には人を吹き飛ばせる程の力はない。それがここまでの威力を持ったのは自分の無力を理解しその場にある全ての物を了解した結果である。

インパクトの瞬間のみスバルのウィングロードよろしく空間に足場を作り踏み込みをより力強く

自分の体で一番硬い肘を打突の道具として用い

全身にタメを作り

正確に打ち抜ければ最も効果を上げられる鳩尾を狙った。

結果、男は意識に反して呼吸が乱れ飛行魔法に不備が発生。自由落下も伴ってどんどんアルセイドから遠ざかっていた。

「やったね！アルちゃん！」

「……」

なのはは思わずアルセイドに近付くが一方でアルセイドの顔は未だ戦闘のそのままだった。

「まさか……」

「……来る！」

何かを感じてなのはがデバイスと己が身を男へ向けた瞬間。

「風？」

なのはは意識を失った。

「まだ、この程度か……」

力無く己に枝垂れかかるなのはを一瞥し男が呟く。

彼が行ったのは単純、高速で迫りなのはの腹部に一撃浴びせただけ。なのはの全力の一撃が怖かったであろう彼にとっては最善の一手。

「……なのはは近接戦には向いてない」

「だが今後それでは足りない」

言われてみればその通り。

戦線で一番後ろのポジションといえど前衛が抜かれる可能性は0ではない。

むしろその場合には自身の前衛より優れた近接格闘者と戦わなければならぬ。

しかし、そんな当然の言葉の中に気になる物があった。

「……今後？」

そう、男は言葉の頭に“今後”と付けたのだ。

まるで未来に何かが起きるかのよう

「おっと失言だったかな？」

確信を突かれたであろう男の対応は、なんて事はない自然体だった。おもむろにおどけて見せた男は
でも と続けて、

「こんな些細な事に気付けるなら案外、俺達の役目は少なく済みそうだ」

「……よく分からない」

実直な感想、アルセイドは思ったままを男にぶつけた。
元々感覚で得た違和感が根拠だ。
揚げ足取りのようなものだ理論なんて毛ほどもない。

「ハハハ、感覚で違和感に気づいたのか！面白い！色々話したい事もあったが、残念」

時間だ

男の言葉と共に、遠くで火柱が立ち上がった。

「何があった？」

間髪いれずはやてがロングアーチに通信を入れる。

(反乱です！陸上108を中心にいくつかの部隊が武装蜂起を！)

「なんやて！？」

告げられる現実。

一つの思考毎に何故の二文字が埋め尽くす。

「これも、あなたの仕業なんか……！」

聞こえないと知りながら吐き捨てるように言葉をひねり出す。
纏まらない思考の中はやては頭上の敵を睨みつける。

「……始まったな。有りがちな表現だが運命は転がりだした。もう
同じ場所に止まる事は許されない。変わるか、変わらぬまま死ぬか
……」

「……あなたは何をするつもりなの？」

気絶したなのを受け取り、アルセイドは男に問う。

「そうだな、世界を救うって言ったらどうだい？」

「誰かを傷つけても？」

「そうだな、それは困る。俺は恨まれるのだけはごめんだな」

矛盾

「でも、やらなきゃならない」

義務？

「君たちに出来ないのなら」

「……」

そう言うと男は背を向ける。

その意は拒絶、もはやアルセイドから語りかける言葉は無かった。

男は手を翳し魔法陣を展開する。

その横にはいつの間にかアリシアがいる。

そして、一際魔法陣が眩しく輝き

男たちは消えた

後に残ったのは夜空を焦がす炎と人の声。

第八話〜嵐の過ぎた後で〜（前書き）

漸く八話です。

気分屋なので更新の激しい時とそうでないときがあります。

今回は日常編です。

1番スバルとティアナの会話が書きやすい

第八話　嵐の過ぎた後で

謎の男の襲撃の後、時空管理局は事態の収集とある問題の解決に追われていた。

それは犯罪の多発である。

部隊の離反によって大なり小なりの戦力の低下が起こり、がたついた指揮系統を見てこれ幸いとばかりに犯罪は増加した。

そんな、時空管理局の危機に厄介者の多い機動六課は尖兵として各地に派遣されていた。

「死ね！」

「まったく！いつまで続くのよこんなの！」

愚痴を垂れ流しつつティアナが魔力弾を避けつつ男に接近する。

「何！？」

相手を中長距離専門だと思い込んでいた男は狼狽し簡単に接近を許す。

「とりあえず寝ときなさい」

相手の目の前で踏み切り、相手の頭を越える。その際に頭を足でつかんで地面に叩きつける。

「ん〜そういうの私には分からないかな〜」

気絶した男達にバインドを掛けて拘束していくスバルが答える。
場所はミッドチルダ市内の銀行。

先の犯罪増加の例に習って立てこもり事件が発生。
隊長陣が出るような事件でも無いためフォワード達に白羽の矢が立
ったのだ。

「ティアナさん！スバルさん！大丈夫でしたか？」

前線で一番後方に位置どるキャロが2人に駆け寄る。

エリオはその持ち前のスピードで真っ先に人質の元に向かって救出
作業を行っていてまだそれが終わっていない。

「心配してくれてありがとう、キャロ」

「そ〜だよ最初に比べたらブーストも必要な所にビシッて感じてい
い感じだしね」

お互いを労う3人。

あの襲撃以後、実践の機会が圧倒的に増加したフォワード達はもの
すごいスピードで成長した。

始めは人を相手にするという事に迷いも見られたが、最近では“や
らなければならぬ事”と割り切る事が出来てきたようだ。

ティアナは撃って投げれる司令塔。

スバルは頑丈さと同世代には並ぶ者がいない程の突撃力。

エリオはより磨きをかけたスピード。

キャラは二ーズに応じたブーストと切り札の召喚術。

それぞれが自分の長所を伸ばし短所を互いに補う。
チームとしてフォワード達は確実に仕上がっていた。

「お待たせしました！」

ようやくエリオが合流しフォワード達は他の管理局員に報告、引き継ぎを行い六課に向けて足を運びだした。

「不便ねー」

軍用車両らしき車を運転しながらティアナがごちた。

犯罪の増加に伴ってヘリなどの特殊な移動は出来る限り制限された。普段の出勤には今ティアナ達が乗っているような運転者を含めて6人ほどが搭乗可能な軍用車両が割り振られた。

当然法治国家のミッドチルダには車の免許制度は存在するが、この車両の制御は搭乗者のデバイスによって行われる。運転者は形だけという法律の裏技みたいなものだった。

「まあしょうがないんじゃない？状況が状況だし」

スバルは後ろのちびっ子2人に目をやりながらティアナに応じる。いくら肉体は成長したとはいえ年齢自体が幼い2人はやることもない車内で頭をお互いに傾けて眠っていた。

「まああの事件でガツンといわされたからね管理局は」

信号に捕まりハンドルを指でコツコツ叩くティアナ。

この機会に免許を取ってしまおうと考えているティアナは今までの動きを頭の中で反復させながら並列して会話の内容を考える。

「あの事件が良かったとは言えないけど。今の管理局は大分風通し良くなったよね」

そう、犯罪が多発するようになって大幅な変革が管理局に迫られた。慢性的な人員不足はさらに如実となり、今まで見たこともない大規模な人材整理が行われた。

つまり有能、志が全てになり過去の栄光や親の七光りを振りかざし私腹を肥やしてきた連中は一斉に放り出された。

かなりの政治的な争いがありいくらかの血も流れたらしい。

強引ともいえるこの改革でスバルの言うとおりかなり管理局の風通しは良くなった。

「あんだ親父さん居なくなったのによくそんな事言えるわね……」

確かに管理局の体質が原点に立ち返り風通しが良くなったのは事実だが、優秀な人材が離反していったのもまた事実だ。

陸上108部隊の隊長でスバルの父親、ゲンヤ・ナカジマもその一人だ。

「アハハ……私は親離れのいい時期だったんじゃないかって思うんだけどねー」

「何よそれ……」

ティアナは苦笑しながら話す相棒に釣られるように笑みがこぼれた。丁度信号が変わりティアナは車を動かす。

デバイス制御の車ゆえに多少の操作を練習として操作させて貰って

居るのだ。

「私はわりかし大丈夫何だけどギンねえがねー」

しばらく車を走らせているとスバルから話題が飛び出した。

「あーギンガさんお父さんっ子だったわよね」

そーそー とスバルが最近の姉の様子についてつらつらと話し始める。

それならあなたはお姉ちゃんっ子ねと誰もが思う中ティアナは相づちを打っていた。

「に、してもあなたの親父さんはなんであの男といつちゃったのかしらね」

話の切れ目を見つけて今度はティアナから話題を切り出す。

窓の外を見れば日は傾き出しており、報告書を書き終わるのは日が沈んでからになりそうだった。

「わかんないなー最後まで一緒にいたギンねえが言うには“クイントに会いに行く”とか言ってたってさ」

がしがしと頭をかき困ったように言うスバル。

その言葉に引っかかるころがあったのかティアナが聞く。

「あなた、クイントさんって確かもう何年も前に……」

「うん。そうなんだけど、父さんが冗談で母さんのこと言ったことは無かったから気になってね」

そう。

ゲンヤが去る直前に出した名前はスバルたちの亡くなった母の名前だった。

これがどういった意味を持つのかティアナには見当もつかなかった。

「まさか世界救うために名誉の戦死とかって……」

「やめてよーティア」

縁起でもないことを呟いたティアナにスバルが口を尖らせて反論する。

「悪かったわね、お詫びにあそこのケーキ屋さんに寄ってきましょう」

「さんせー！たまにはお土産必要だよね」

甘いものと聞いてテンションのあがるスバルをなだめながらティアナはデバイスに了承を取って車を停めた。

「てか、軍用車両をこんな民間の所に停めていいの？」

スバルの疑問も当然。

基本的に今は仕事でその上この車両は軍の物だ。

私的利用が許されるものではない。

加えてここは民間地、ただでさえ犯罪多発で緊張感が高まっているのにこれでは市民を過度に刺激する。

「いやーのよこんな機能もあるんだし」

言いながらティアナが車のドアノブに触れた。
すると触れた指先から波が伝うように車の色と形が変わっていく。
ものの数秒で軍用車両は見た目だけなら一般のワゴン車になった。

「おお〜」

「潜入用のカモフラージュだってさ。マリーさんがうちののに実験的に設置したらしいわよ。さ、私たちも服変えて行くわよ」

言うとティアナはバリアジャケットの要領で服を変化させて店内に入っていた。

「あ、まってよティア〜」

置いていかれそうになったスバルは慌てて服を変えて追いかけた。

136

日はさらに傾き、外は真っ赤に色づく、もう日が落ちるのには秒読みが始まっている。

そんな時間、その部屋にはひとりの少女の姿があった。

濃い青、いや藍色の髪を持ったスバルとよく似た容姿をしたその少女。

名をギンガ・ナカジマと言った。

普段の彼女は10人をして10人が美人という容姿だったが、今の彼女はそんな普段の姿からはかけ離れたものだった。

髪はボサボサ目はうつろ加えて酷いくまが出来ている。

幸いなことに妹が無理やり食は採らせているので頬が痩けるような

ことは無かった。

何故彼女がこんな状態になってしまったのか？

「何で？どうして？」

ふと彼女が小さく口を開き譚言のように一言二言呟いた。

そう、ここしばらく彼女の頭の中は一つの事に捕らわれ続けていた。

「……父さん」

彼女の父、ゲンヤ・ナカジマの事だった。

彼は妻と共に身寄りの無かった自分と妹を引き取り育ててくれた。

早くに彼の妻が任務中に亡くなり、それ以降は不器用なりに男手一人で育ててくれた。

「なんで……」

繰り返す問い。

答えを返す者は無く、彼女は嗚咽を流し続ける。

「あの時……」

せめて自ら答えを出そうと最早何度考えたか分からないあの日を出す。

その日の始まりはいつも通りの日々と変わらなかった。

機動六課が海上で交戦状態に入った時も警戒態勢になったものの大きな変化は無かった。

戦闘が始まって数十分後、変化は突然起こった。

同僚がいきなり自分に向けて武器を向けたのだ。

「あつ」

そこまで思い出したところで意識とは関係なくギンガの体が震え始めた。

時間が経ったとはいえ未だに恐怖が拭えていないのかギンガは歯を鳴らしながらも記憶を掘り返す。

一番痛みに溢れた記憶へと

そこから隊長室までの記憶はぼんやりとしか思い出せない。

多分半狂乱になって取り乱していたと思う。

なにせ今まで笑い合っていた友人たちが感情のない目で一斉に自分へ武器を向けた。

恐くて、訳が分からなくてぐちゃぐちゃだった。

そして、私は父と相對した。

「よー」

武装化した部下が入って来たにも関わらず父はいつもとかわらない様子だった。

軽く手を合げ笑いかける父に少し冷静さを取り戻した私は事の説明を求めた。

「あーまあなんだ。俺ちよつとクイントに会いに行く事にしたわ」

しかし返って来たのは要領を得ない答えだった。

更に疑問が増えた私は追及した。

でも父は全くそれに応じようとしなかった。

「後は八神んとこに引き取って貰えるようにしといたからよ」

ここでようやく思考が追いついた。

まさかと思った。

そんな筈はないと否定した。

でも、現実が変わらなかった。

「ま、そう言う訳だから頑張れギンガ」

これから辛いだろう

俺を恨むだろう

それでいい

それを糧に強くなれ

誰にも負けないくらい強くなれ

そう結んで父は消えた。

足元にはいつの間にか展開された魔法陣があつて、私が抗議の声を上げる暇さえなく。

「無理だよ父さん……私、無理だよ……」

「あんだ何するつもりなのよ？」

ティアナが隣にいる蒼髪の相棒に声をかける。

日はとつくに沈んで、フォワード達は皆で夕食を採り終わったばかりだ。

一時間後に六課の代表たちによる会議が差し迫っていた。

「ギンねえ殴りに行く」

そう短く告げたスバルはバリアジャケットの鉢巻きを結び治した。

「あー……止めはしないけど程ほどにしときなさいよ。私、連帯責任で壁直すの嫌よ」

「大丈夫！会議にはギンねえも連れてくからフォローよろしく！」

いい笑顔で親指を立てるスバルにティアナは思わず苦笑が漏れる。

こうなったらスバルはもう止まらないのだ。

自分の満足するまでやり抜く。

それがスバルなのだ。

「ハイハイ、いつてらっしゃい」

「うん」

短く答えてスバルは駆け出した。

そして、今日も食事を採ろうとしなかった姉の部屋の前で高らかに宣言した。

「食事のお誘いに参りましたあー！」

次の瞬間、扉が弾け飛んだ。

「あの、ティアナさん」

スバルが出て行った食堂でおずおずとキャラコがティアナに話しかける。

「ん、何？あ、すいませーん何でもいいんで特盛りの料理用意して貰っていいですかー？」

「えっと、止めなくて良かったんですか？後、その料理って……」

遠くから響いてくる破砕音にビクつきながらキャラコがティアナに質問する。

「料理はあれよ。ギンガさん用。それと、あれでいいのよ。確かに無理やり止めることも出来たけど」

そこでティアナは一旦言葉を切って溜める。

「くすぶってるスバルをあんたは見たい？」

その言葉にキャラコをはじめエリオもはっとする。

「だからあいつのやりたがってる事はやらせておけばいいのよ。ま、こっちに火の粉が飛んでこない限りにはね」

飛ばしたら私があいつをしめる。

と冗談を交えながら話すティアナにちびっ子2人は感動する。

いつか自分たちもと思って振り向くと、相手も同じ事を考えていたのか顔と顔が向かい合う。

2人同時に微笑んで顔を再びティアナへ向ける。

「にしても最近のギンガさんは私もはっ倒したいと思ってたし、丁度良かったわ」

皆が黙る中ティアナは言葉を続ける。

「自分の事棚に上げて言うけど、私たちはもうへこんでる暇なんて無いのよ。ひたすら前に進むしかないの」

あの男の言うとおりにみたくて癩だけどね

部屋の扉が轟音とともに弾けとんだ。

外はとつくに暗くなっていたが部屋に明かりはなかった。

「歯あ食いしばれえ！」

スバルは叫ぶとベッドの上にいる人影に向かって拳を突き出す。

鈍い音と共に人影は吹き飛び壁にぶつかった。

その時、スバルのデバイスのマツハキャリバーによって灯りがつき部屋の様子がはっきりと映し出された。

拳を突き出した状態で静止するスバルと、殴られた意味が分からずただ床に倒れ伏すギンガ。

そんな呆然とする姉の様子も構わずスバルは動き出す。

「おおおおりやあああ！」

痛烈な蹴り、俗にサッカーボールキックといわれる救い上げるような蹴りだ。

体の浮いたギンガの胸倉を掴みスバルは眼前まで引き寄せる。

「何してるのよギンねえ……？」

スバルの漠然とした問いかけ、でもギンガは視線をそらすだけで口を開こうとはしない。

「父さんはいなくなった。でも、それが何？」

そんな人形に話しかけるような行為をスバルは繰り返す。

「父さんがいなくなった理由は私は分からない。でも、それには何か意味があるんじゃないの？」

紡ぐ

「それなら、今私たちができることは何なのか？」

ただ言葉を

「前に進む、泣いても砂を咬んでも前進することじゃないの？」

だが、どんなに言葉を重ねても目の前の姉には届かない。

「ッ！……こんな状態なら父さんなんかはじめからいない方がよかった」

突き飛ばし、はき捨てるように言った言葉に初めてギンガは反応した。

「……へえ、まだらしいところあるじゃん」

ギンガの拳を腹に受けながらスバルが呟く。

「父さんがはじめからいなければよかつたなんて！」

感情を叩きつけるようにギンガが拳をスバルへ叩きつける。

「あなたが！言って良い言葉じゃない！」

「そつだよ！ギンねえはこつだよ！私と殴り合いして全部吐き出しちゃつてよ！」

その言葉を皮切りに溜まったものを吐き出しながら姉妹の喧嘩は激しさを増していった。

第九話　新しい決意の下で

外は全ての光を飲み込む黒で塗りつぶされていた。

場所は会議室、そこには管理局地上本部機動六課の主要な面々がほぼ勢ぞろいしていた。

会議までの時間は後数分と言うところで、各々会議で話す内容を確認するなど思い思いに時間を使っていた。

そこに突然どよめきが生まれた。

「すみません、遅れました！」

言葉と共に会議室に飛び込んできたのはスバル。

元氣印の彼女がこういつた行動を起こすのはもう数ヶ月以上の付き合いになる皆にとっては想定内だった。

しかし、今回はその後ろにいた人物が問題である。

彼女の姉でアマテラスの天の岩戸よろしく部屋に閉じこもりきりだったギンガ・ナカジマがスバルの後ろに現れたのである。

「すみません。ご迷惑お掛けしました、ギンガ・ナカジマこれより機動六課の臨時隊員として参加します」

大きくはないがはっきりと通る声で宣言をしたギンガは深く頭を下げた。

「謝らんでええよ」

ふと気が付けばギンガの前にはやてがいて声を掛けた。

「私かてまだ整理がついてへん。それなのに肉親のギンガがこんな

に早く立ち直ってくれて私は嬉しいよ」

笑顔で優しい言葉をかけるはやてにギンガは幾分救われた気持ちになる。

「私には出来のいい妹がいるので」

言われたスバルははにかんだ笑みを浮かべた。

ギンガが言った意味が分からず、首を傾げる者もいたがそれでもギンガは良かった。

自分はそれで救われたのだから。

「よっしゃ。メンバーも全員揃った事やし、そろそろはじめよか」

はやての言葉を皮切りに機動六課の会議が始まった。

内容は最近の任務の報告から教導による経過。

そして、あの謎の組織について。

「よし、通常の任務、業務については問題ないな？そんなら今回の本題や。とりあえず被害報告からやな。グリフィス君頼むわ」

はやての呼びかけに呼応して報告が始まる。

「あの日、陸士部隊が5つ蜂起を起こし自らの隊舎を含むいくつかの建物を襲撃しました」

あの日夜空を焦がした火柱は離反した部隊の隊舎から出た物であった。

「機動六課の被害はシャリオ・フィニーノ。そして恐らくですが、フェイト・テスタロッサ執務官」

そう、あの騒動によって蜂起した一部隊は戦力の多くを前線に吐き出した六課へ迫り、治療中のシャリーを強奪した。

この事を報告しなければならぬ彼女の幼なじみでもあったグリフィスの心境は複雑であろう。

「報告ありがとな。で、連中の動向何やけどな」

妙なんや

はやての放ったその一言で場の緊張感が一気に高まる。

「あれ以降、あいつらの“管理局へ”の攻撃は全く無い」

あれだけ大規模に管理局に対立攻撃を行ったにも関わらず、彼らの管理局に対する目立った行動はほぼ無かった。

そればかりか、大きな犯罪組織を潰す動きすら見られた。

目下、六課の最大の敵として浮上していたスカエリツティ一味も、つい数日前に壊滅の疑いが出ていた。

ミッドチルダ山中にあったアジトが崩壊していたのだ。

目的の不明さによって管理局は事態を静観すべきと結論を出した。

「相手の目的は全然見えへん。規模も戦力も不明や。正面からぶつかるのは避けるとしても実態は掴んでおきたい」

そこで、や

言葉を切り、メンバーを見渡すはやて。

誰もが次に飛び出す言葉を予想し、また期待しているように見えた。

「普段の任務と並行してあの組織の調査を始めようと思う」

言い切ったはやての顔には覚悟が見え、呼応するように皆が頷く。

「みんなの負担は今までの倍以上になってしまいかも知れんけど、それでもええか？」

はやてから二度目の確認の言葉が飛ぶ。

「大丈夫だよ、はやてちゃん。ここにいるみんなはそれ以上に強いよ」

上手く言葉に出来なかったなのは口ごもったが、皆には意志が伝わったらしい。

皆の目に覚悟の色が光りやる気に満ち溢れていた。

「ありがとう」

短くはやては告げ、目の端を何気ない動作で拭った。

いつの間にか自分自身を追い込んでしまっていたのだろう、自分も予期しなかった涙に内心微笑み自分がまだ笑える事を確認する。

「よっしゃ！ならまずは足跡探しやな。早速で悪いけど、スバルとティアナ」

呼ばれた2人が返事を返す。

「2人には明日からミッドのダウンタウンに行って貰えるか？」

「あの時にシャーリーさんが何をしていたか、ですね？」

「その通りや、よろしく頼むで。後なのはちゃん」

続いてはやてが告げた名前は自身の親友、高町なのはだった。

「なのはちゃんは有給とって貰ってフェイトちゃんの探索した遺跡を見てきて貰えるか？」

言葉を発した瞬間、その場にどよめきが生まれた。

はやてがなのはに向かうよう命じたその場所はそこに向かった調査隊がフェイト意外全滅し、そのフェイトですら意識不明の重傷を受けた所である。

何が行ったとしても不思議ではない。

しかし、その場所はその危険性からそれ以降調査は放棄されている。つまり何らかの手掛かりは残っているかも知れない。

そんな最も危険でかつ望みがありそうな命令を下すはやて。

「危険なのはわかってる。でもここ抜きには話が進まん気がするんや。行ってくれるか？」

「うん、分かった」

なのはは二つ返事で引き受けた。

彼女の中で危険性と友人を救うと言う事は天秤にかけるまでも無いことだった。

「ん。今、名前が挙がったメンバー以外は通常の任務に加えてしっ

かりと訓練をすること。そやね、これで会議はひとまず終了やな。何か言いたい事のある子はいるか？」

そう言つてはやては会議を終えようとする。

皆が賛成の意を唱える中一人だけ反対を唱える者がいた。

「待つて貰いたい。何故、私には何の役目も無いのですか？」

シグナムだ。

「無いとは言つてへんよ。訓練と待機を命じたやんか」

はやては至極当然といった顔でシグナムをいなす。

「そうではなく！何故、私を捜査任務に就かせてくれないのですか！」

そう、シグナムの不満はそこだった。

この数週間シグナムは取り憑かれたように自身の鍛錬に勤しんだ。

全てはアリシアを打ち倒すため、自らをもっと高みへ持ち上げるため。

そうして回つてきたのが今回の会議だ。

「私がどんな気持ちでこの日を待ち望んだか！」

漸く、自分の育て上げた力を試せる機会を得るところまで来たのだ。その千載一遇のチャンスが目の前で失われた。少なくともシグナムにはそう思えた。

「私にとって闘いは全てだ。闘う私が私たらしめる全てだ。それが

失われたら、それを奪われたら私は私はア！」

もはや吼喉、痛みをはらんだ叫びが会議室に響き渡った。

「そんなことは知らんよ」

冷たい響き

シグナムの訴えは一蹴された。

「はやてエー！」

主も騎士も忘れ、激昂したシグナムはデバイスではやてに切りかかる。

が、感情に任せた一撃は同じくはやての騎士のヴィータによって止められる。

「離せ、ヴィータア！」

「そうは行かねえよ。アンタははやてに剣向けてんだ。アタシが守らなくてどうすんだ」

「ヴィータ、そのまま抑えとき。シグナムそんなに私の命令が気に入らへんのなら」

いい機会や

とはやては続ける。

「二週間ほど、仕事こんでええよ」

会議室の温度が2、3度下がったような錯覚が皆を襲った。

「時間はあげるからよく考えとき。他に意見は無いな？なら解散にするで」

宣告を受けて崩れ落ちるシグナムを尻目にはやては強引に会議を打ち切った。

「あ、あの食堂に私たちが昼間に買ってきた差し入れがあるんで良かったら寄って行って下さい」

次第にざわめきつつある会議室にスバルの声が響く。

「ま、よく考えな。はやてもお前が嫌いであんな事言った訳じゃねえよ。アタシにはよく分かんねえがお前にもなんか理由があるんじゃないのか？」

そう言ってヴィータはシグナムの肩を叩いて部屋から出て行った。

会議を打ち切った後、直ぐに部屋をでて行ったはやては給湯室にいた。

「私は嫌な隊長やな……」

「そんな事は無いですよはやてちゃん」

独り言のつもりで呟いた言葉は、思わぬ所で返事があった。

「シャマル……」

自分に返事を返したのはシグナムたちと同じ夜天の書の守護騎士の一人、シャマルだった。

「あれははやてちゃんがシグナムを思つての言葉だったんでしょ？」

シャマルの問いかけにははやては小さく頷く。

「なら大丈夫よ。シグナムだって馬鹿じゃないわきつと分かつてくれるわよ」

そう言つて自分を励ますシャマルに対してはやては素直に同意出来なかった。

確かにシグナムに期待を持つて突き放したのは事実だが、この前にあつたなのは事件を考えると本当に分かつて貰えるのか不安で仕方がなかった。

「ま、何にしてもその時にならないと分からないわよ」

その言葉に背中を押されはやては顔を上げた。

「せやな。なら、スバルとティアナの差し入れ、食べにいこか」

第十話〜真実の探索〜（前書き）

ティアナ、スバル編になります。

キャラ崩壊、オリキャラが出てきます。

ご注意を

あ、あとスバルが空気

第十話 真実の探索

会議の翌日、通常の任務が終わり時刻は午後5時である。日の沈みかけたこの時間にティアナとスバルはミッドチルダのダウンタウンを訪れていた。

「あーもー鬱陶しいわね！」

突然ティアナが不満を爆発させる。

と、言うのもここに入った瞬間から2人には幾つもの視線が降り注いだ。

妬み、羨望、恨み

そんなどす黒い視線に2人はストレスを溜めていた。

そもそもここはミッドチルダと言う都市が成長の過程で産み落とし、切り捨てたゴミ溜め。

こういったスラム街は華やかな都市があれば必ず生ずるものだ。

そんな表の都市と圧倒的な格差のある街で表の人間は歓迎されない。

「まーまー気にしたら負けだってティアナ」

こんな時でもマイペースなスバルは最近はあまりそうでもないが元々線の細いティアナにとっては救いだ。

「に、しても……なーんでこんな所に用事なんかあったのよシャーリーさんは」

「アハハ……確かにそうだね。私たちもそうだけど女の子だけで

来るところじゃないよね、」」」

自分たちに突き刺さる視線を再確認しながらスバルは呟く。

「ま、そう言うのは本人のみぞ知るってところでしょ。さて、ログに
よるとこの辺だけど……」

グダグダしゃべりながら歩き続けた2人は漸く歩みを止める。
2人のいる場所はスラム街の路地裏と言う更に危険な場所。

「なあ……誰に許可とってここに入って来てんだよ」

声を掛けられ2人が振り向けばそこには典型的なチンピラの姿があ
った。

「ああん？」

2人が振り向く間にすら怒りのボルテージを高めたらしいそいつは
肩を怒らせ2人に近づく。

「パス。あれ無理」

「えええ！ティアア」

短く呟きティアナがスバルをチンピラへ押し出す。

「私だつてやだよあんなの」

「うっさい！得意の殴り合いで何とかしなさいよ！」

「ああ〜？びびってんのか？なんなら一回で勘弁してやるよギャハハハ」

揉める2人を見てチンピラは2人が怯えていると結論をだす。

下衆な笑みを浮かべ、その手にはナイフを弄んでいる。

表情には嗜虐的なものが見え、ティアナたちは彼にとって獲物のように見えているだろう。

「……気が変わったわ」

「私もちよーっと気になったなあさっきの発言」

先程まで騒々しく揉めていた雰囲気は一気に霧散し静かな闘志が燃え上がる。

「誰がびびってるって!」

「てめえいつの間!」

男はいつの間にか蒼髪の女が目の前に現れた事に面食らった。

「うおおおおりゃあああ!」

間髪入れずスバルの右拳がチンピラの腹部にめり込んだ。

「まだ終わりじゃないわよ」

くの字に折れ曲がった男の体にティアナが腕を回す。

そして一息で男の体を引っこ抜く。

そのまま自身をブリッジ状に反らせ抱えた相手を頭部から地面に落

とす。

これによってスバルの一撃で呼吸が乱れていたチンピラは完全に意識を失う。

「まったく、嘗めるのも喧嘩売るのも相手見てからにきなさいよね」
手を払いながらティアナが呟く。

「だから相手を考えろっていったのに」

どこに隠れていたのかあちこちからチンピラの仲間が集まってきた。どうやら仲間の復讐を考えているのではなくやられた仲間を回収に来ただけらしい。

「！ちよつとアンタら！」

何かに気付いたのかティアナはチンピラ回収して撤収しようとしていた3人に声を掛ける。

「は、はい？」

反応したのは先程チンピラに向かって溜め息をついた小柄な男。攻撃を仕掛けられた事に対してのいちゃもんでもつけられると思っただのか声の上擦った。

「アンタらこの辺の事よく分かるの？」

「ああ」

話しかけられた男がどう答えたものか迷っている内に、ティアナたちから見て一番奥側にいた男が短く答える。

「なら二週間くらい前の事、教えてくんない？」

「何故だ？」

先程答えた無口そうな男から言葉が返って来る。

見るからに表側の人間からのアプローチ、当然この街の住人は警戒する。

「二週間くらい前に何の気紛れかここに来た同僚がいてね」

「それは珍しいツスね。ここはそんなにほいほい表側の人間が来れる所じゃないツスよ」

首をもたげた興味を隠そうともせず、小柄な男が話に食いついてくる。

「ニーク、不用心だぞ」

「ごめんツス」

不用意にティアナたちに近づいた小柄な男、ニークが無口な男にたしなめられる。

「話を戻すわよ。それでその同僚なんだけど、その後重傷で表で見つかったの」

驚愕

その場はそれに支配された。

「……いいだろう、俺も興味が湧いた。だが、ここでは場所が悪い」
誰に聞かれるか分からんからな。

そう言っつて男は背を向けた。

横にいた三人組最後の一人の女が抗議するような声を上げていたが男がとりあう様子は無かった。

「でもさッ！」

「セリル、コイツが負けてあいつらが勝った。分かるな」

女が感情的になったのを見て男が背負ったチンピラを指して短く発した。

「分かってるさ、そのくらい……」

「こつちの話はついた。待たせたな」

そう言っつて男はチンピラを背負って歩き出す。

2人は後に続き、ダウンタウンの更なる奥地へ足を踏み入れた。

男に連れられ十数分後、ティアナとスバルは古ぼけた喫茶店にいた。今、この場にいるのは無口な男とティアナたちのみで他のメンバー

はチンピラの介抱に当たっているらしい。

どうやら運営しているのはあの無口な男のようで、カウンターに立つ姿も様になっている。

カウンター席に座る2人が人が居ない理由を聞けばまだ開店前なのだそうだ。

「元々はこの地域に昔からあった店なんだが、都市化に伴って廃れていき気付けばこの様だ」

「でも、大切な場所何でしょ？」

溜め息をつく男にティアナが声を返す。

見れば、確かに古い建物だがきちんと掃除されていて埃一つ見当たらない。

そうだな……

そう呟く男の顔にティアナは出会ってから始めて笑顔を見た。

「良いものだな、表の人間も」

「でしよう？ 偶にはこっちに出てきて見なさいよ」

思わず、口からこぼれた独り言に笑顔を返すティアナ。

男もつられるように微笑み

考えておく

と返した。

「そう言えば自己紹介がまだだったな……濟まない、少し待っていてくれ」

そう言うと男は店の裏に下がった。

「なにになに〜ティアもしかして運命の出会い？」

すると今まで沈黙を保っていたスバルがいきなりティアナに近づいて来た。

「うっさいわね。ただ、似てると思ったのよ」

あの時の私と

そう呟くティアナの横顔は何か不思議な魅力があり、スバルは言葉を失った。

「濟まない、待たせたな」

言って男はカウンターに座っていた2人をテーブルへと移動させ、近くにあったテーブルを引き寄せると全員が席に着けるようにした。

「それでは改めてだな……俺はゴダールだ。一応このグループのリーダーをやっている」

無口な男ゴダールの自己紹介を皮切りに皆の自己紹介が始まった。

「自分、ニークツスよろしく」

「……セリル」

「私はティアナ」

「私がスバルだよ」

ティアナとスバルがダウンさせたチンピラは未だに回復していないらしくこの場にはいなかった。

ひとしきり自己紹介が終わると会話は本題へと流れていく。

「……話は大体理解した。あの路地はここから大通りに行くためには絶対に通らなければいけない道だ」

「そうなんツス。んでもってあの日は丁度仕入れの日でよくあの通りを使つてたツス」

「でも、争いの素振りどころか血痕もなかったと……」

その通りだとゴダールは頷く。

「手がかり無しね……」

「そうツスね……」

手詰まり

まさしくこの言葉に尽きる状況だった。

「……手が無いわけでもない」

「「……」

その時、ゴダールから光明のような一言が飛び出した。

「でも、このタイミングで言うって事は“何か”あるんでしょう？」
目を輝かせるスバルに対してティアナは冷静に内容を整理する。

「鋭いな、その通りだ。今のままではこれ以上の情報は無い」

「……！ゴダール、アンタ！」

今まで会話に加わらず、傍観を決め込んでいたセリルが声を上げる。

「もしかしてアイツツスか？」

セリルの慌て様を見てニークにも閃く人物がいるらしい。

「奴だ、“千里眼”アイツ以上にこの街を知るヤツはいない」

「冗談じゃないよ！アイツに殺された奴が何人いると思ってんだい
！」

半狂乱になって叫ぶセリルに、ただならぬ気配を感じティアナとスバルの視線が鋭くなる。

「“殺された”ね………どういう事なのかしら？」

ティアナがゴダールに鋭い視線を向ける。

「千里眼は何でも知っているし条件をクリアすればここの住人なら

誰でも何でも教えてくれる」

「ってことはその条件が問題何だよね？」

スバルの発問にダウンタウンの住人たちはゆっくりと頷く。

「何、条件は簡単だ“自身を打ち倒すこと”これだけだ。至ってシンプル、この街の唯一絶対のルールだ」

「そうさ、たったそれだけさ。でもそれだけが叶わなかった奴がごまんと居るのさ！」

「奴に勝てなかった相手はことごとく殺されたツス。奴が言うには敗者には当然の報いだそうツス」

三者三様の言葉にティアナたちは千里眼について考える。

あまりにも世界が違う

それが2人の正直な感想だった。

表のミッドチルダでは喧嘩はあっても命が奪われるような事は殆ど無い。

むしろそれをさせない様にするのが自分たちの仕事だ。

「軽いわね……」

ティアナの口から思わずこぼれた本音。

「命が、か。そうだなここでは命があまりにも軽く、そして重い」

溜め息をつき、独り言のように言葉を発するゴダール。

「そうよ！アタシの命はアタシの物よ！アンタ達の情報なんかのために賭けれる訳ないじゃない！」

より燃え上がるセリルの感情。

「あんだ、何でそんなに強がってんのよ」

いきなり響いた冷たい声。

「ちょ、ちよっとティア！」

いきなりとんでもないことを言い出すティアナにスバルはうろたえる。

「……何だって？」

反論される事など思って無かったセリルだが、浴びせられた言葉を理解し眉をひそめる。

「そうね、強がってる？いや正しくなかったわね何をそんなに“怯えてるの？”」

「アンタ！」

憤ったセリルはいきなり立ち上がり向かいの席のティアナの胸倉を掴む。

「あんだ、いい加減にしなさいよ」

胸倉を掴まれても全く怯まずこちらを睨み返してくるティアナにセリルの勢いが僅かに削られる。

「あんと千里眼の間に何があったか知らないけどね、自分の力不足、不甲斐なさを他人のせいにして当たり散らして逃げてんじやないわよ！」

場の空気が温度を失っていく。

「アンタに、アンタ達に何が解るってのよ！」

ティアナを突き飛ばし、セリルが吠える。

「解んないわよ、知らないからね。でもね、そんな自分の事を人のせいにするのは我慢なんなのよねッ！」

突き飛ばしたお返しとばかりにティアナがドロップキックをかます。

「あゝこりゃ駄目かも」

「おい、止めさせてくれ。店が無くなる」

「きびしいかなあティアもキレちゃってるし」

「ゴダール、んな事言ってるより机と椅子を集めるッス！巻き添えで立ち呑み喫茶に成るッスよ！」

勝手に始まった女同士の戦いに、残されたスバルと男達は店を守ろうと奔走する。

「まったく何なのよ！アンタは！勝手にズカズカ入り込んできて！」

「知ったこつちやないわね。あんたこそ私の嫌なところばっかそつくり生きてんじやないわよ！」

「それこそ知ったこつちやないよ！アタシとあんたが似てるって？ハツ笑わすんじゃないよ！」

売り言葉に買い言葉。

一語一語に思いを込めて殴り合う。

「アタシはね、アイツに家族を殺されたんだよ“資格のない者が知を得ようとするな”ってね」

「へえーだから人の死も知らない表の人間なんか知った口を利かれるのは我慢ならんって？」

「その通りよ！四六時中幸せそうな顔をして、平和ぼけしたアンタらに同情なんてされちゃ堪んないのよ！」

セリルの口から飛び出た彼女の過去。

家族を殺され天涯孤独になったという

だが

「まったくホントにムカつくわねえ！“家族が殺された”それが何？問題はそこから自分がどうしたかでしょうが！」

ティアナはそんな事で後込みはしない。
アルセイドに諭された事で、良くも悪くも吹っ切れたティアナは自分の事など棚に上げてセリルに言葉を叩きつける。

「あんたはその千里眼にビビってたただ逃げてるだけじゃない！あんたがすべきは真実を調べる事が復讐よ」

復讐を促すおおよそ管理局員からは発してはいけない言葉。
そんな言葉を留める理性すら振り払ってティアナは殴り合う。

「それに、同情？甘えるのもいい加減にしなさいよ。私はただムカつくからあんたと殴り合ってるのよ！」

まさかの八つ当たり宣言。
しかし、勢いで相手を上回る。
こんな下らない喧嘩ならそれで充分、詰まるところ相手を飲み込んだ方が勝ちなのだ。

「ツク！ナメてんじゃないよ！」

防戦一方だったセリルが防御を捨て、破れかぶれに殴りかかる。

「……………戦いはジレたら負けよ」

セリルの大振りな攻撃を見たティアナはポツリと呟き行動を始める。
攻撃の予想進路から半身分体を逸らし、前に出る相手の動きに合わせる。こちらの拳を突き出す。

「！」

完璧なカウンター

女同士の喧嘩は静かに幕を下ろした。

「…………ん」

セリルは静かに目を覚ました。

「…………ッ！」

起き上がった瞬間に体に走る痛みに思わず顔をしかめる。

「…………アタシの部屋？」

体を動かすとズキズキと体中が痛むので頭だけを動かして周りを見る。

見える家具は見知った物だ。

「そう。あなたの部屋よ」

いきなり横から声が響き、そちらを見れば見知ったオレンジ髪が立っていた。

「ティアナ…………」

「ようやく名前で呼んでくれたわね、セリル」

セリルが無意識に呟いた名前に反応して笑みを返すティアナ。

「助かったわよ。あんたが喫茶店の二階に住んでて」

あんまり遠かったらキツかった

そう言っただけまた笑うティアナにつられるようにセリルも笑顔が零れる。

今、2人がいるセリルの部屋は喫茶店の二階の一室。

どうやら元々アパートだった物の一階を改装して喫茶店に下らしい。二階建ての二階部分は未だに住居としての機能が残っており、セリルを始めあのグループは全員ここに住んでいるらしい。

「アンタが運んでくれたのか？」

「そうよ。ぶっ倒したのは私だからね」

お陰でスバルにはぶん殴られた。

そう言っただけ自分の頬を指差す。

そこには一際大きなガーゼが張られていた。

「すつきりした？」

「まあね、本気で殴り合う喧嘩なんて小さい頃に弟とやった以来さ」

普段よりも気分が軽くなっている気がするのか言葉も軽くなるセリル。

「改めてなんだけど、協力してもらえん？」

「分かったよ……喧嘩にも負けちまったしな」

痛む体を引きずって手を差し出すセリル。

「よろしく、セリル」

「ああ、よろしく。ティアナ」

2人は手を取り合って笑った。

「私は下にいくけどあんたはどうする？」

「アタシも行くよ。いつまでも転がってる訳には行かないよ」

決着が付いた2人は下の喫茶店に降りていった。

下に2人が降りて行った先で出くわしたのは、横たわるあのチャンピラだった。

そして周りを見渡せばすぐ近くに拳を突き出した格好で固まるスバルがいた。

「何があつたのよ……」

頭に手を当てたため息をつくティアナ。

「あ、えーとさっきカイクが起きたツスそんで……」

どうやらあのチャンピラの名前はカイクと言つらしい。

ニークが言うには目が覚めたカイクが店に降りて来て店にいたスバルを見て突っかかっていった。

始めはスバルも言葉で対応していたのだが、カイクは自分の意見しか聞かないらしく全く会話に成らなかった。

ニークやゴダールも説明したが全く取り合わず、いい加減我慢の限界だったスバルがぶん殴った。

「まったく、コイツは何考えてんだか……」

セリルが呆れるように呟く。

「バカはほって置いて話を進めよう」

ゴダールが皆にコーヒーを出し、話を始めた。

「現状、俺たちには千里眼に情報を聞き出す程の力はない」

「そこなんだけど、あんたら管理局に興味はない？」

「何？」

ティアナの提案にゴダールが眉をひそめる。

「別に入れてって言うてる訳じゃないんだけどねこっちも“訳あり”でね」

「なるほど、先の反乱で人手が足りないって訳ね」

「そう、傭兵でもアルバイトでもパートでも今戦力が欲しいのよ」

そこで一旦言葉を切り大きく息を溜めるティアナ。

「どっつ？雇われてみない？」

第十一話 痕跡1 (前書き)

この2人書きにくい……
スッゴい短いですがすみません

第十一話 痕跡1

会議から数日後。

なのは長い付き合いであるユーノ・スクライアと件の管理外世界を訪れていた。

管理局の無限書庫という膨大なデータベースで司書長という立場に就く彼はその立場上あまり休暇を取ることは出来なかったが、遺跡の調査という大義名分を掲げる事によってこの問題を解決した。

「にしても久しぶりだよー」

「そうだね、なのは。同棲と言っても休日が重なるわけじゃないしこんなに何日も一緒にいることは本当に久しぶりだ」

間もなく籍を入れる予定の2人だが、ワーカーホリックの性分ではないかなかなか休みを取らずここ最近では顔を合わせる機会も少なかった。

「あ、そう言えばエリオとキャラ口はどう？最近寝顔しか見てあげれて無いけど」

「うん。2人とも元気だよ。特にエリオなんて日に日に大人っぽくなってるし」

良かったとユーノは頷き歩を進める。

やはり、2人にとって気にかかるのは引き取った2人の子どもの事。男と女の情愛よりも父性、母性が先に立つ2人の姿は恋人と言うよりは夫婦のそれに見えた。

「でもあんな事になるなんてね……」

「本当に何が起こるか解らないよね」

脳裏にチラつくのは世界が動き出したあの日の残滓。

「結局フェイトちゃんがどこにいるのかは解らないままだし」

「だけど、彼女の姉がああ男の所にいるなら」

ユーノはなのはを傷つけ内容な言葉を慎重に探しながら会話を続ける。

なのはに対してのフェイトの話をするのは地雷原を歩くようなものだ。

やはり十年来付き添った友人というのは相手が例えどう思っているかと自分にとって掛け替えのないものだ。

「うん、分かってる。絶対にフェイトちゃんはその男の所に居て、私たちに立ちはだかる」

そう決意を持って話すなのはに少しユーノは気が楽になる。

「でも、まだ解らない。立ちはだかるフェイトちゃんにまた自分が立ち向かえるか……」

口をつく管理局、エースオブエースの弱音。

ユーノが彼女を見ると彼女は小さく震えていた。

「それでいいよ、なのは。その決断は最後でいい。戦う前にどんな言葉や覚悟を用意したってそれはきつと偽物さ」

「うん……」

小さく頷くのは。

そうこうしているうちに2人の目の前にはフェイトが調査したであろう遺跡がそびえ立っていた。

「ここか……」

圧倒されるようなスケール。

巨大な神殿とおぼしき遺跡は無人となった世界で森に埋もれながらも堂々とそこにあつた。

「じゃあ、行こうか」

そう言ってユーノはなのはを伴って遺跡に足を踏み入れた。

「凄い……」

なのはの口から思わず言葉が零れた。

遺跡に足を踏み入れた2人は中の光景に驚きを隠せなかった。

淡く緑色に発光する壁や床、2人が踏みしめる床の石畳一枚一枚に文字や装飾が刻まれている。

「僕もこんなのは初めてだ……とりあえずサーチチャーを飛ばそう」

「了解。数はどのくらいにする？」

「そうだなあ……10個ぐらい試してみようか？魔力残量は大丈夫

「？」

大丈夫 と短く伝えてなのはサーチャーを生成する。その様子は手慣れたものであつという間に作り終えた。2人合わせて計20個のサーチャーを飛ばし遺跡の全体像を把握する。

それまでは、入り口付近で拠点を作る。

「キャンプなんてするのいつぶりだろ？」

「そうだね、僕も忙しくて現場にはなかなか来れなかったし」

そんな事をいいながら2人は楽しげに作業を進めていく。

「うん、今日はこんなものでしょう」

「そうだね、サーチャーも大体の形を調べ終えたしね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0444r/>

魔法少女リリカルなのは 裏切りの翼

2011年11月10日09時17分発行